

仮面ライダーハーメル
ンジェネレーションズ
THE SECOND CROSS

マフ30

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数多に存在する並行世界。

そんな数ある中のひとつの世界は仮面ライダーがテレビで放送されている世界。

仮面ライダーが虚構とされる世界に再び危機が迫る——。

大都市に突如として出現した謎めいた螺旋の塔。

平穩の裏側で暗躍する異世界からの侵略者たち。

立ち向かうは仮面を纏う二人の戦士。

それは——求道の銀騎士。

それは——退魔の白装士。

物語が交錯し、少女たちは巡り会う。

※ハーメルンジェネレーションズとはハーメルンで投稿されているオリジナルライダー作品のコラボ企画となります。

本作品はそのメインストーリー第二弾として私、マフ30の仮面ライダービャクアと春風れつさー様の仮面ライダー銀姫のコラボ小説です。

本作品は共同執筆作品となります。

※リンクはこちらから

仮面ライダー銀姫

<https://syosetu.org/novel/262790/>

仮面ライダービャクア

<https://syosetu.org/novel/257215/>

ハーメルンジェネレーションズ第1弾はこちら

<https://syosetu.org/novel/253025/>

目次

■ 戦姫が駆ける	150
■ 遊行	119
■ 交流	91
■ 銀と白	67
■ 邂逅と逃避行	49
■ 夜会	26
■ 献花	1

■ 献花

鐘を鳴らすようなチャイムが鳴り響く。チャイムは学校ごとにそれぞれ違うというが、普通で有名な鹿毛野高校のそれは誰もがどこかで聞いたことがあるような没個性な音色だ。

「ん、ここまでか。じゃあ授業終わりー」

それを聞いた時、限時間際まで黒板に文字を書いていた教師が顔を上げ、ようやく授業が終わった。待ち構えていた日直が素早く「気をつけ、礼」までを早口で言い切る。学生の休み時間は一分一秒が重い。解放された生徒たちは弾けるように五月蠅くなつて、わらわらと席を立ち思い思いの場所へ赴く。更科さらしな朔月はしめも、その一人だった。

「ねえ、さっきの授業全部分かった？」

朔月は友人の机に駆け寄って首を傾げながら聞いた。答えを返すのはその机に溶けるようにして突つ伏す女子生徒と、その机の前の席に座っているもう一人の友人だ。

「無理ー、ぜんっぜん分かんなかったー」

「あの先生、解説はビミョーだから」

「あはは……板書はちゃんとしてくれてるんだけどねー」

友人たちの意見に苦笑しながら頷く朔月。友人と語らい、授業への愚痴をこぼす。彼女は平凡な女子高生だ。……つい、先日までは。

少々家庭に事情を抱えている朔月はそれでも大枠で見れば普通の女子高生だった。しかしとある弓張月の夜、ノーアンサーと名乗る少女に誘われ悪辣なゲームに巻き込まれた。

ライダーバトル。仮面ライダーという戦士に変身し、互いに殺し合うバトルロワイヤルだ。勝者となったただ一人が願いを叶えられるという甘言に踊らされ、少女たちは殺し合う。

常人を超えた力。剥き出しの殺意が飛び交う戦場は朔月を酷く傷つける。違う自分に変身したい——そんなごく普通の願いしかもたない彼女は強い願いを持つ他の少女と戦い、迷い、戸惑う。

戦いを止めるべきなのか。自分は何をすればいいのか。その答えは未だ、出ない。

「でさ、今日はどうす——」

それでも日中はいつも通りの日常を過ごせる筈だった。ライダーバトルが行なわれるのは夜中で、ノーアンサーの作り上げた異世界だ。だから昼間、学校の時間は気兼ねなく過ごせる——その筈だったのに。

「……………？ 花びらっ？」

ふいに、開いた窓から風と共に赤い異物が舞い込んできた。朔月の眼前でヒラヒラと舞うそれは、薔薇の花弁だった。

「なんだろう、これ。薔薇……かな。どこから？」

疑問に思った朔月が見渡すと、ぎよつとした。風を通すために開け放たれた窓。そこからいくつもの花弁が吹き込んで、教室内をいくつも舞っているからだ。それだけではない。窓の外は、もつと多くの赤い花弁が視界を埋め尽くさんばかりの勢いで吹雪いていたのだから。

「何、これ……!？」

明らかな異常事態に朔月は竦んだ。二人の友人も、クラスメイトもそうだ。中には呑気に綺麗だとのたまって携帯端末で撮影する者もいたが、概ね恐れ、恐怖していた。

（あれ……なんか……）

そんな中、なまじ荒事に巻き込まれているからだろうか。

朔月は、流れが変わったことを感じ取っていた。

例えるなら静から動へ。

ゆつたりとした海の細波さいなみが、荒波へ変わるかのよう——。

「危ない！」

そう朔月が叫ぶとほぼ同時。花卉の動きが変わった。風に吹かれるがままだった薔薇たちは急にその軌道を変え、教室へと殺到した。その勢いは、窓ガラスを叩き割る程だった。

「きゃあつー！」

誰かが悲鳴を上げた。そしてそれはすぐに阿鼻叫喚の大合唱となる。

突如凶器となった花吹雪に生徒たちは逃げ惑う。中には実際花卉に傷つけられ、血を流している生徒もいた。刃の雨が降りしきる危険地帯と化した教室から脱出すべく、我先にと出口へと殺到する。

朔月もまた、呆然とする友人たちの背を押し込んだ。

「朔月!？」

「早く、行つて!」

大切な友人たちに万が一があつてはならない。そんな思いで朔月は友人たちを必死に逃がした。雪崩れる人の波に飲み込まれ、あつという間に二人の姿は見えなくなる。

「よし……」

後は自分も避難を。

そう思つて振り返つた瞬間、目に入る。

自分へ真つ直ぐ飛び込んでくる、数枚の花弁を。

「あ——」

死ぬ。

そう直感した瞬間、横合いから強い衝撃がやってきた。

「ボーツとするな！」

弾けるように押し出される朔月の身体。一瞬前まで彼女のいた空間を擦過し、薔薇の花弁は教室の壁へ小気味いい音を立てて突き立った。朔月の身体が穴だらけになる運命を間一髪逃れられたのは、飛び込んできた少女のおかげだった。

朔月に抱きつくようにして庇つたのは、つい先日やってきた転校生、りゅうぎき竜崎そう爽だ。赤い髪に意志の強そうな切れ長の瞳を持つ彼女は、朔月と同じくライダーバトルの参加者でもある。

「わっ……あ、ありがとう、爽……」

「だから呆けてる暇無いつて！ こっちー！」

爽に手を引かれ、二人は走り出す。教室を出ると、廊下は避難する生徒で濁流のような流れが出来ていた。他の教室でも同じような状況だったのか、生徒たちは皆飛び出して花弁の嵐とは反対方向へ逃げている。

だが爽は廊下の曲がり角を、みんなとは逆に、つまり花びらの方へと舵切った。

「爽!?! そっちは、逆じゃ」

「この状況、普通の自然現象じゃない！ だったら……」

その言葉に朔月もハツとする。尋常じゃない状況は、つい最近自分の身にも起こったではないか。

「まさか、ライダー関係……？」

「かもしれない。それに、違くても」

そう言つて爽は胸元の女神像、マリードールを握りしめた。

「アタシたちなら、戦えるから」

「……そっか。うん、分かった！」

爽の言葉は真つ直ぐと朔月の胸を突いた。確かに、自分たちならこの現象を解決できるかも知れない。

マリードールがある以上、仮面ライダーへ変身する力は現実でも有効な筈なのだから。

そうして二人が飛び出したのは校庭だった。

「……アイツ、だね」

「うん……」

花吹雪の発生源を探す。そう意気込んでいた二人だったが、その原因となりそうな存在はあっさりで見つかった。

他に誰もいない校庭。空中に薔薇の花弁が渦巻くその中心に、ポツンと佇んでいたのだから。

それは、あるいは女騎士のように涼やかで荘厳な気配を纏っているようにも見えた。甲冑の如き装束。腰にはサーベルを佩いて、右手には茨の鞭を携えている。首から下なら、騎士物語に出てきても違和感は左程無い。

その頭に咲き誇る、赤い薔薇を除けば。

見間違える筈もない。薔薇の花吹雪は、どうみてもこの異形が原因だった。

「あれ……ライダーじゃないよね」

「うん。加えて言うなら、ダムドでも無さそう」

彼女たちライダーバトルの参加者が戦う相手は、お互い以外にもう一つある。

戦場たる異世界に湧く、ダムドという亡霊だ。戦場を埋め尽くさん数で跋扈する異形たちはボスダムドという頭目を掲げてライダーに殺到し、その生ある肢体を食ろうとする。ライダーバトルを邪魔するその異形は全ての参加者にとっての敵だ。

だがダムドは通常のダムドにしる頭目たるボスダムドにしる、理性なき悪霊だ。意味を成す言葉をしゃべることなく、奇声のような叫びしか発しない。

故にこそ、薔薇騎士の凜とした、理知的な女性を彷彿とさせる佇まいは違うと断言できた。

『……ふうん。貴様たちがこの世界の仮面ライダー、という訳か』

「喋った……」

薔薇騎士から発せられた怜悯で女性的な声音に、静かに衝撃を受ける朔月。確かにライダーバトルに身を置いて非日常をいくらかも体験しているが、目に見えて異形である相手が言葉を発する機会にはまだ恵まれていなかった。化け物が人間の知性を持つ——その未体験のショックに揺さぶられながら、問い返す。

「あ、あなたは何者？」

『私は栄えある魔人教団の末席。ローゼンメタロー』

薔薇騎士——ローゼンメタローは地面へと鞭を叩きつけながら名乗りを上げた。

『同胞からは陽動を言いつかつたが……しかし』

ローゼンメタローは朔月と、並び立つ爽を眺め——目線が何処にあるのかは分からないが——失望したように首を振った。

『とてもまともな抵抗が出来るとは見えんな。我が決闘の相手が務まるとは思えん。であるなら、それはそれで構わんか』

空いている手でローゼンメタローがパチンと指を弾けば、途端に薔薇の花吹雪は収まった。まるで挨拶は終えたと言わんばかりに。

『ライダーという脅威の無くなったこの世界を侵略し、我が勲章に花を添えよう』

「魔人教団？ 侵略？」

訳の分からない単語に朔月は混乱する。だがその隣で爽は、マリードールを握りしめ臨戦態勢を取る。

「……アンタたちが何者かは知らない。けど」

その瞳にはライダーバトルの時と同じ、揺らぐことない覚悟の炎が燃えていた。

「この世界をどうしようと言うのなら、アタシが相手になる」

爽の啖呵が耳に届いて、朔月も覚悟を決める。背後にあるのは、学校——自分の日常。そして友人たちだ。このローゼンメタローなる輩がこの世界に仇なそうというのなら、彼女たちも巻き込まれてしまう。それだけは、嫌だった。

「……私も」

朔月もまた、胸元からマリードールを引き出す。

「私だって、みんなを守りたい！」

二人は鎖き合い、マリードールの鎖を引き千切った。同時に、腰元に黒いドライバーが出現する。

「——変身！」

そのドライバーの中心に白い女神像を叩きつけるように装填した。ネックレスとなっていた鎖はマリードールを巻き込んで鎖で縛り付けているかの如く纏わる。その

瞬間二人の身体は二色の光に包まれ、問うような歪んだ電子音が鳴り響いた。

《《Blood》》

《《守護^{まも}るは希望 誰の？

叶えるは野望 誰の？》

赤の光に包まれるのは爽。赤黒いアンダースーツの上に紅のコートを纏い、鋭い眼差しをそのまま表現するかのような青いバイザーが着装される。腰からは爬虫類じみた尻尾が伸び、獲物を睥睨する蛇のように鎌首をもたげる。

剣舞の赤。覚悟の炎を逆巻かせる情愛の戦士。仮面ライダー血姫、推参。

《《Silver》》

《《戦いは止まらない 何故？

運命は変わらない 何故？》

銀の光に包まれるのは朔月。黒いアンダースーツの上には銀甲冑が装着され、シヨルダーアーマーより死神めいた襤褸がたなびく。鈍く光る鉄仮面と昆虫じみた複眼は、どこか虚ろな空気を漂わせている。

防壁の銀。己の空虚と運命に未だ惑う求道の戦士。仮面ライダー銀姫、登場。

二人は口元から覗く唇を硬く引き締め、ローゼンメタローと対峙する。

そんな二人を見て、ローゼンメタローは悠然と構えた。

『ふっ、来るがいい。本当の闘争という物を教えよう』

火蓋を切ったのは血姫だった。ローゼンメタローに向かつて真っ直ぐに駆けながら右腰のパーツを叩く。すると赤色の光が集まり、晴れると右手の中には一本の直剣が握られていた。

「はあっ！」

突進の勢いのまま、その剣尖真っ直ぐに突きを放つ。加速度を乗せた原始的な、しかし強力な一撃。それをローゼンメタローは自身に届くより早く、鞭を振るって打ち据えた。

「がっ！」

茨が強かに血姫の腕を叩いた。たまらず血姫は足を止め剣を取り落とす。そしてそれだけに終わらず、茨は生き物のようにならねると血姫の腕に巻き付いた。

『ふっ。私は戦いに至るまでは正々堂々を信条としているが、いざ幕を落とせば少々残虐だね』

ローゼンメタローはその常人を超えた膂力で鞭を思い切り引いた。当然の帰結として、血姫は校庭に叩きつけられる。

『このままいたぶらせてもらおうか』

再び鞭を振るう。すればその先端に括り付けられた血姫は引きずり回される。砂ま

みれになっていく血姫を見て銀姫は慌てて駆け出した。

「爽！　つて、やあつ！」

銀姫もまた、腰のパーツをはたく。見る見る内に集まった銀の光が弾けると、そこには一本の細い剣。陽光で銀色に反射する刀身を閃かせ、銀姫は血姫を縛る鞭へと振り下ろした。

『おっと。これはいけない』

だが刃が触れる寸前、茨はするりと解けローゼンメタローの手の中へ舞い戻る。空振った細剣は空気を裂く音を虚しく響かせた。

「くっ、爽、大丈夫？」

「けほ……平気。でも、手強い」

起き上がって砂埃をはたく血姫は改めてローゼンメタローを睨み付ける。悠然とした薔薇騎士は。パシンと鞭を音を鳴らして挑発する。

『さてもう折れてしまったか？　手応えがないようなら加虐の悦楽に耽りたいのだが』
「誰が……！」

血姫は歯ぎしりしながらもう一本の剣を生み出す。

「爽！」

そこへ、銀姫が丁度足元に転がっていた直剣を投げ渡す。それを空いている手に受け

取り、血姫は両手に剣を構えた。

双剣。それこそが手数が武器である血姫の真骨頂だ。

「ふうー……行くよ」

「うん！」

示し合わせ二人は一斉に駆け出した。左から銀姫が、右から血姫が迫る。

『はっ、鞭が一本しかないから挟み撃ちか？ 安直だな』

二人の作戦を鼻で笑いつつ、ローゼンメタローはまず鞭を銀姫へ向け振るった。風切り音と共に茨が銀姫の甲冑を叩く。

「ぐっ……爽！」

だがこれは範疇。銀姫は己の装甲を引つ掻いた鞭を掴んだ。棘が食い込む痛みは無視して握り込む。

その隙に走るのは血姫だ。銀姫が鞭を抑えている間に一気に接近する。

『だから安直だと言っただろう！』

「!? わふっ！」

だがローゼンメタローが空いている手を翳すと、そこから無数の薔薇の花びらが発生した。血姫は赤い奔流に前を遮られ、足を止めてしまう。

『ふっ！』

血姫の足が止まった隙に、ローゼンメタローが茨の鞭を引つ張った。先の血姫の二の舞を銀姫で演じようというのだ。

だがここで、計算外が起こった。

「くっ……ああっ!!」

『何!?!』

動かない。ビクとも。

ローゼンメタローが引く力に、銀姫は全力で抗っていた。

そも銀姫は、血姫より腕力が強い。そういう性能のライダーだ。

加えて更に、もう片方の腕で細剣を地面に突き刺し杭としていた。支えを得た銀姫の力はローゼンメタローのそれに拮抗する。

『おのれ……っ!』

「はあっ!」

今度はローゼンメタローの足が止められる。そこへ薔薇の妨害から立ち直った血姫が躍りかかった。刃圈。双剣が降りかかる。

『チイツ!』

まず一本目をローゼンメタローは空いている手で迎撃した。武器を扱っているがローゼンメタローは徒手空拳も本領だ。しかし続く二本目の刃は防げなかった。騎士

甲冑の表面で火花が散る。

『ガハッ!』

「曇み、かける!」

一度着地し、再度身を翻す。血姫得意の連続攻撃だ。再び上から双剣で襲いかかる血姫に対し、ローゼンメタローは激昂した様子で左手を腰元に伸ばした。

『舐めるなよ小娘!』

抜刀。柄に薔薇をあしらったサーベルが引き抜かれる。そして鋭い剣術で一撃を迎撃し、のみならず先は決められた二撃目の合間を縫って空中の血姫を斬りつけた。

「あうっ!」

「爽!」

打ち落とされた学友の姿に銀姫は思わず動揺した。鞭を握る手が緩み、その隙を逃さずローゼンメタローは茨を自分の元へ引き戻した。

「あっ!」

『ふん。……本気を出していると思ったのか? だとすると蜜の如く甘いな……!』

ひゅんと空気を切り裂く音が響き、神速のサーベルが墜落した血姫を襲う。血姫は咄嗟に蹴りでそれを防ぎ、急ぎ立ち上がる。その瞬間の無防備を、茨の鞭は巻き取った。

「ぐっ!」

茨の鞭は両手を巻き込んで血姫に巻き付いた。棘が食い込む痛みにも双剣を地に落とし、血姫は拘束される。

『私を傷つけたのだ。榮譽としてまずはお前から死をくれてやろう』

薔薇のサーベルがキラリと閃く。今の無防備な血姫では、その剣尖は容易く喉元へ届くだろう。

『死ねえッ!』

振り上げられる剣身。だがそれが血姫の首を落とすより早く、歪んだ電子音が鳴り響く。

《Silver Execution Finish》

『何っ!』

それは宣言。お前よりも先に、首を落とすという処刑宣告。

「はあっ……!」

少し離れた場所にいる銀姫が八双に構えた細剣に銀の光が漲る。昼間に似つかわしくない月の光にも似たそれが刀身全てを埋め尽くした瞬間、細剣は上段から斜めに振り下ろされた。

「やああっ!!」

何も無い空間を斬る。だが空振りにはならない。その剣の軌跡が、銀の光となって迸

るからだ。

細剣の斬撃は刃状のエネルギーとなって宙を裂く。血姫にトドメを差そうとしていたローゼンメタローは避けられず、銀の光を真正面から受け止める羽目になる。

『ぐあああつ!!』

光の刃は鞭を切り裂きローゼンメタローの身体を傷つけた。だが撃破にはまだ至らない。

騎士甲冑に渓谷のような深い傷を刻まれたローゼンメタローは怨嗟の声を上げて銀姫を睨む。

『貴、様ア！ 私に、傷を……！ 許さん、殺してやる……！』

「そうね。でもそうするのはアンタじゃない」

『あ……？』

怒りで気が逸れてしまった。その一瞬が彼女にとっての致命だった。

「あの子を殺す権利は、アンタには無い……！」

《 Blood Execution Strike 》

茨の拘束から解放された血姫の右足に赤い光が煙る。それは炎のように噴き出して、血姫の身体を高く跳躍させた。

「はあつ!!」

空中で身を捻った血姫は燃える右足を横薙ぎに蹴り抜けた。銀姫のつけた傷跡に吸い込まれるように叩き込まれる爪先。爆ぜる炎。

着地した血姫は振り返ることすらしない。結果が分かりきっているからだ。

『が……悔り、過ぎたか……』

胸元に巨大な風穴を開けたローゼンメタローは、火花を上げながら空を仰ぐ。

『済まぬ、同胞よ……先に散ろう……！』

そう言い残し、ローゼンメタローは青空の下爆発四散した。

校庭の中心に穿たれた爆炎を見て、ようやくと銀姫は力を抜く。

「ふうー。終わった、よね？」

「ん、多分ね」

座り込んで変身を解除する朔月とは裏腹に立ち上がった血姫は警戒するようにを辺りを見渡し、次の脅威が無いのを確認してから変身を解いた。

「……はあ。何だったんだろ、アイツ」

「うん……学校、壊れちゃったね……」

朔月は背後を振り返り、失意の溜息をついた。校庭側に面した窓ガラスは軒並み叩き割られ、その無惨な様相を晒していた。

「明日、休校になっちゃうかな」

どこか呑気な朔月の言葉に「いや、それが普通でしょ」とツツコミをいれる——より先に、聞き覚えのある声が木霊した。

『それは大丈夫よ。すぐに修正されるところから』

「え？ ノーアンサー？」

それはノーアンサー……朔月たちをライダーバトルに引き込んだ張本人の声だった。だが朔月が見回しても、いつも通りのナイトドレスを着た銀髪の美女の姿は無い。

「あれ？」

『こつちよ。こつち』

神出鬼没な彼女が逆にいらないことに首を傾げる朔月だったが、声の方向を辿って視線を降ろす。そこには声の調子に合わせて淡い光を明滅させるマリードールがあった。

「え？ ノーアンサー？ そこにいるの？」

『そこにはいないに決まってるでしょう。マリードールを通じて話しかけているのよ』
「これ、通信機にもなるんだ……」

感心したようにマリードールを手に乗せる朔月の横から爽もまた覗き込む。彼女自身のマリードールは別に光っていないようだ。

「どうしたのよ。いつもいつの間にか後ろに立っているのに」

『んー、ちよつと移動中ですね……。今遠くにいるのよ。だから取り敢えず要件だけと

思ってたね♪』

「説明？ あ、修正って何？」

マリドールから声が響いた衝撃ですっかり忘れていた言葉を思い出し問いかける朔月。だが答えはすぐに訪れた。

強い風が吹いたかと思うと、まるで映像が逆再生されるかのように学校が修復されていくからだ。

「え？ 何あれ……あれが修正ってこと？」

「…朔月！」

学校を見上げて呆然とする朔月の肩を叩き、爽は振り向かせる。そこには風で吹き払われた爆炎の中心地があった。炎の消えた中に、誰か女性が倒れている。

「えっ……ひ、人!? ま、まさか……」

さあつと顔を青ざめさせる朔月。もしや自分ほとんどないことをしてしまったのか……そう誤解して血の気が引く。

だがマリドールが明滅し、それを否定した。

『違うわよ。その子はメタローに取り込まれていただけ。修正が終われば記憶を失って意識も取り戻すわ』

「あ……そうなんだ。よかった〜」

安心したように溜息を吐く朔月。だがその隣の爽は険しい顔を崩さない。

「それで、そのメタローって何者？」

『魂を物質化した高次元生命体……と言っても貴女たちには分からないわよね。まあ、世界を超える侵略者といったところかしら』

「侵略……だからアイツはあんなことを口走ったのか」

ローゼンメタローの言動を思い出し納得する爽。一方で朔月は置いて行かれ気味だ。普通の女子高生は脳味噌の出来も普通だ。

『まあ、本題はそこじゃなくって』

「そうなの？」

『ええ。……銀姫』

「ふえ？」

突如呼ばれて間抜けな声を漏らしてしまう朔月。それを気にすることなくノーアンサーは続ける。

『これから貴女にちよつとしたおつかいを頼もうと思うの』

「おつかい……？」

『ええ、出先で適当な物を採取するだけの簡単なお仕事よ。それをする為の器具も預けておくから、頑張ってね♪』

「へ？ いや待って何のこと？ 一体……」

聞き返そうとした瞬間、着信音が鳴り響いた。人生を楽しむことを高らかに歌う軽快なポップス。朔月はすぐに自分の着信だと理解しポケットを探った。

「私だ……え？」

取り出したスマホの画面を見るまで朔月は、避難した友人の内の誰かがかけてきたのだと思っていた。だが、表示されている電話番号は文字化けしていた。

「これ……？」

『ああ、丁度来たみたいね。なら忠告しておくわ』

「へ？」

『死なないでね、そして逃げないでね。仮面ライダー。貴女はこの世界の物なのだから』
そして、マリドールの輝きが消える。ノーアンサーの声も消え、後には鳴り響く着信音だけが響き渡る。

「えと……？」

戸惑う朔月に、爽は顎でしゃくってスマホを示した。

「取り敢えず、出てみれば？」

「う、うん」

この状況では悪戯電話とも思えず、朔月はとにかく着信に出てみることにした。通話

ボタンを押し、耳に当てる。

「? ノイズ……?」

だか雑音だらけで録に聞き取れない。砂嵐の只中のような耳障りな音にやはり悪戯なのかと首を傾げそうになったその瞬間。

『……イダー……す、けて……』

「声……子ども?」

ノイズの中から微かに届いた声。それがどうやら小さな子どものように聞こえて、朔月は耳を澄ます。

その瞬間、一瞬だけ全ての雑音が消え去り、ハッキリと耳に届く。

『たすけて! 仮面ライダー!!』

悲痛な叫び。誰かを呼ぶ声。

それを聞いて朔月の心に真っ先に浮かんだのは戸惑いだった。誰? 何故? どうして自分? 様々な疑問が去来しては泡のように弾ける。

「誰、ですか? どこにいるんですか!」

だがそれでも、最終的には良心が口を動かす。

「行きますから、場所を教えてください!」

それは彼女の気質。どんなに惑っても、悩んでも、それでも良識を捨てられない彼女

の性^{さが}。あるいは薄っぺらな正義感とも例えられるそれは、しかしそれでも彼女を導いた。

助けを求める、その場所へ。

「…………え」

呆けたように声を上げたのは爽だった。何故なら朔月が電話の声に応えた途端、忽然と姿を消したのだから。

「消えた…………」

誰もいなくなった空間を見つめ、爽は修正の風が吹き荒れる校庭でただ一人立ち竦んでいた。

「…………あれ？」

一方でまた、朔月も似たような間抜け声を漏らしていた。

目の前に乱立するのはビルとビル。都会という言葉を絵に描いた光景は、朔月も見覚えがある。何度か友達に連れて行ってもらった、東京の風景そのままだ。

「あれ？」

しかも、何故か夜だ。絢爛な明かりが降り注ぐ街中は夜闇で視界が遮られることは無

いけれど、しかし自分は昼の陽射しを浴びていた筈なのに。

「あれ、れ?」

そしてトドメに、遠くに聳える建造物。

地上からの光と自ら放つオーラを以て存在感を示す、この世の物とは思えぬ黒き螺旋の塔。

「……えーと」

視線を上げて、下げて、そしてポツリと呟く。

「お財布、通学鞆の中なんだけど……」

非現実的な事象の渦中で、彼女は極めて現実的な窮地に陥っていた。

■ 夜会

痛い。怖い。痛い。怖い。怖い。怖い——。

もうずっと、その二つの情動が私を支配している。

投稿している動画の再生数を上げるために山林にある墓地での季節外れの肝試しを提案してきた友人への怒りなんてとつくの昔に消え去っていた。いや、塗り潰されていると言ったほうが正しいかもしれない。

「キイイイイッ!!」

「ひいつ!?!」

闇の向こうから響いてくる怪鳥音に私の全神経はゾツと恐怖に震えた。

まるで夜が私に怒鳴っているよう。

風に揺れる木々のざわめきが悪魔の笑い声のように聞こえてくる。

空に浮かぶ月は分厚い雲に隠れてしまつて途方もない漆黒がじわりじわりと恐怖を苛む。

逃げなきや。

電池が尽きかけている携帯の心細い灯りだけを頼りに。

走って、走って、逃げないと……きつと待っているのは死。

「やだ……やだやだやだっ！」

痛い。

体中のあちこちが痛い。

呼吸をする度に肺が痛み、口内は微かに鉄分の香気が漂っている。

べったりと全身に滴る汗がここまで逃げる道中に奴らの爪でつけられた引つかき傷に染みて痛む。

石や小枝が散らばり不安定な野道を無我夢中で走ってきたせいで新品の靴はいつのかにか片方が脱げていた。足の裏もどこかで切ったのだろう、独特の痛みと熱がじんわりと伝わる。

不格好な走り、だけど闇の深さもあつてそれほどの速さも出せずに彷徨っていると不意に私の二の腕を尖った何かがなぞった。

※

「ひぐつ!?! やだあ! やだあ! なにつ!?!」

線状に感じる痛みには女は完全にパニックに陥った。

泣き喚き、唯一の光源である携帯が手元から飛んで行ってしまったことにもお構いなしで両手を振り回して錯乱する。

言葉にならない咽びを上げてうずくまり、どうかこれが悪い夢であつて欲しいと強く瞼を閉じてみたりと無意味で無駄な行動をとつてしまふ。

仕方のないことだった。

無理もないことだった。

だけれど、たったのそれだけでも女が彼らに追いつかれるには十分過ぎる時間の浪費だった。

携帯の光が女の腕に触れたただの枯れ木の枝を照らしている最中に無数の足音が蠢く。

「え……きやああああつ?!」

女は心臓が止まつてしまいそうなほどの絶叫を上げたがそれは彼女を取り囲む異形の群れの奇声で掻き消されてしまう。

異形の一体が不意に蹴飛ばした携帯が再び持ち主の傍に転がって、心許ない光がこの世界に本来はあつてはならない異形たちの姿を照らした。

「キシヤアアアツ!!」

不快感を煽るぬめりを帯びた黒い体にイナゴを思わせる灰白の仮面をつけた人型達。歯を剥き出しにした憤怒の口元はただただ生々しく見る者の忌避感をこみ上げさせる。

なによりも卒倒しそうになるのはその数だ。

ただ一人の女性を取り囲むのにぎつと二桁の数が群がっている。

まるでゴミ捨て場に湧く害虫のような気持ちの悪さだ。

「こないで……ゆるして……おね、がい……あああああああ?!」

涙も冷や汗も垂れ流して、女は恐怖に吞まれて狂ったような悲鳴を上げた。

しかし、助命を乞う懇願は聞き入れられることはない。

この異形たちは本能で生者を襲い貪る亡霊なのだ。

亡者たちの名は——ダムド。

こことは異なる世界で執り行われている七人の少女たちの禁断の祭典を彩るために在る者たち。

少女たちの決闘場あるいは殺戮場に棲まう、あり得ざる異形たちなのだ。

「や、やだあああつ!!」

数え切れない怪物の尖った手が女に伸びていく。

女はその場に蹲り、幼子のように泣きじやくつて身をよじる。

それに何の意味があるのだろうか。

嗚呼、残酷にも女は蟻の巢に落とされた一粒の角砂糖のような運命を辿るのだ。

もしも、彼女が暮らすこの世界に人々に隠れて魔を退ける守り人たちが存在しなければの話だが。

「退魔七つ道具が其の式——!!」

白風が吹き荒び、鬱蒼と群がる魍魎魍魎が散り飛んだ。

二刀の太刀風がまるで空の彼方にまで届いたかのように気が付けば満月を隠していた雲もどこかに流れて、夜でありながら影を作るほどの月明かりが女を助けた者の姿を露わにする。

「——裂空の快刀!!」

曇りのない刃が月光を受けて輝く。

流麗な剣の舞がひしめき合う無数のダムドを胸がすくような勢いで斬り伏せていく。

二振りの快刀を操るのは望月沙夜が変身した白い鴉面と軽鎧に身を包む御伽装士／
仮面ライダービャクアだ。

「て、天狗……ひゃあ?!」

「すみません。少しきつい体勢でしょうがここにいてください。それから私の指を見
て」

「は、はい」

「オン・カンラ」

女が見つめる目の前でビャクアの指先に灯った不思議な火が線香花火のように弾けた。

ビャクアは助けた女性を墓所の傍らに建てられた小さなお堂の屋根に運ぶと仙術を使って記憶を消すのと同時に意識を奪ったのだ。目が覚めた時の混乱を考えると少し気の毒だがこの悪夢のことは覚えていないだろう。

「失礼を。さて……彼らは一体何者でしょうね」

間一髪で無辜の人を救い出せたことに安堵したのもつかの間、ビャクアは屋根の上から墓地に溢れかえる謎の怪人ダムドの膨大な数に舌を巻いた。

「意思の疎通は不可能と見受けますし、何が目的なのか分からないのは気掛かりですが人を襲う以上はここで残らず掃討します」

一、十、二十、三十……数えるのが馬鹿らしく思えてくるほどのダムドの一団。

流星に百はいないだろうと思いつながら自分に敵意を向けていまにも飛び掛かるとしている正体不明の敵陣にビャクアは気持ちを引き締めて斬り込んだ。

「ハイヤア——!!」

河原の石を跳び渡るように数体のダムドの頭部を踏み越えて、ビャクアはある墓石を

背にできる場所に陣取ると雪崩のように殺到するダムド達を二刀流で切り払う。

罰当たりなことだが墓石のお陰で背後は取られない。

後は根比べだとはかりに快刀を振るい不気味な仮面の亡者を切り刻む。

(脆いですね。化神ではない……しかし、以前戦ったメタローはこんな知性のない獣のような立ち振舞いでは無かったですし、彼らは一体?)

鋭い爪牙を突き立てて襲ってくるダムドの軍団ではあつたがその悉くがビヤクアの快刀の餌食になっていく。まるでチリ紙でも斬っているような容易さで次から次へとダムドは斬撃を受けては黒い霧のように霧散する。

戦いへの集中を緩ませること無く、ビヤクアは敵の正体を模索した。

絵空事のような話だが以前にも別世界からの侵略者と戦ったことのある彼女にはダムドの正体について様々な仮説を立てられるだけの経験を持っていた。

「いまはこれ以上考えていても仕方ないですね！ 手早く片付けましょう」

万が一の不覚の原因にもなるだろうとビヤクアは思考を戦い一本に切り替えるところ果敢に攻め出した。二本の快刀を柄尻で連結させて双刃の槍のようにすると風車のように回転させて、敵を切り裂いていく。

ダムドの耳元にヒュンヒュンと風切り音が鳴ったと思えば次の瞬間にはそのダムドの首や胴が飛んでいく。ビヤクアの快刀はまるで芝を刈る回転鋸めいた怒濤の勢いで

夥しい数いたたダムド達を斬り捨てていった。

「シイイイガアアアアア!!」

「なっ……セエツ!!」

このまま一気に全滅させると意気込んだその時だった。

暗闇から鋭利な鎌刃が独特の軌跡を描いてビヤクアの首筋を狙って迫ってきた。

自らも大鎌を得意な得物としているのが功を奏して、驚きながらも確実な防御に成功した彼女は謎の凶刃を押し退けると身構えた。

「シヤアアアアツ!!」

「むうっ、かなりの一撃ですね……新手か!？」

夜闇の奥から新たなダムドの増援を率いて姿を現したのは周囲にいるダムド達とは何もかもが異なる新種のダムドだった。

まるでエジプト神話を思わせる黒いジャツカルの頭部を持ち、身の丈ほどの大鎌を携えた姿。胸の膨らみややはつきりとくびれた腰元から女性型であることが窺える。

この異形の名はジャツカルダムド。

複数種存在する通常のダムドよりも強力で固有の特性を有したボスダムドの一種である。

「お前たちは何者か!」

快刀の切っ先を向けて、厳しい語気で問い質すビヤクアだったがジャツカルダムドからの返答は足を刈るように放たれた大鎌の一撃だった。

「全く……比べるのもどうかと思いますがメタローたちの下卑た言葉の数々が懐かしく思えてしまいます」

周囲にあつた墓石を数基まとめて切断する恐るべき大鎌の刃を跳んで避けたビヤクアは複雑な胸中を声にして漏らした。

これだけ数がいいて、誰一人として人語を話さず襲つて来られると言うのも気が滅入ることである。

とはいえ、このジャツカルダムドは恐らく彼らの頭目であるのだろう。

動きの切れといい実力が他の雑魚と呼んでも差し支えない通常ダムドとは雲泥の差だ。

「ギイイイイイイ!!」

「くっ!? 散れ!!」

ビヤクアが着地した瞬間に左右から飛び込んできた二体のダムドが彼女の両足を掴んで動きを止めた。間髪入れずに他のダムド達が取り囲むような動きから一斉に爪を振るう。

あわや物量に蹂躪される危機だったがビヤクアはこれを力任せに振り解く。

話を戻そう。

加えて、どのようなコミュニケーションを取っているのかは定かではないがこのジャツカルダムドが出現してからダムドたちの動きが洗礼され出した。

このように統率された連携が生まれて、脅威としての質が上がっているのだ。

「そういうことなら、大将首を獲るまでです!」

目に見える問題を取り除くべく、ビヤクアは一直線にジャツカルダムドに斬り込んだ。

途中、多くのダムドが壁となつて行く手を阻むがそれらは取るに足らないと瞬く間に一蹴する。

「いゃー! いゃー! いゃー!」

「シイイイガアアアアア!!」

肉薄するビヤクアにジャツカルダムドが振るう大鎌が巨獣の爪のように襲い掛かる。

快刀と大鎌が数度ほど火花を散らす激しい切り結びを交えた後に両者は一度距離を置く。

次に先手を取つたのはジャツカルダムドだ。

縦横から放たれる曲刃が異様な唸りを上げて進行方向にある万物を薙ぎ刈る。

墓石も土塊も木々も構わず真つ二つに両断されていく。

この刃をまともに食らえば、ビヤクアも無事では済まないだろう。

「シヤアアアアツ!!」

しかし、当たらない。

肝心のビヤクアにだけは当たらない。届かない。掠らない。

目を凝らし、殺気を読んでビヤクアは自分に迫る死の刃を紙一重で回避する。

それまで怜悯冷徹な雰囲気を纏っていたジャツカルダムドに心なしか苛立ちのよう
な空気が漂い出した時だった。

大鎌の刃先に何かを裂いた感触を捉え、同時に砕け散った快刀の破片が空に舞ってキラキラと輝いている。

武器諸共に敵を薙いだと扇情的な体躯を弾ませてジャツカルダムドは勝利を確信して月夜に吠えた。

「その犬みたいな顔の割りに鼻は鈍いようですね。せめて油断するならば血の匂いを嗅いでからでしょうに」

凜とした声はジャツカルダムドの恐ろしく間近で聞こえた。

すぐ目の前、その足元。

「ハイヤアツ!!」

次の瞬間にまるで昇り竜のような掌底打ちがジャツカルダムドの顎下を叩いた。

自分の得物を囷として、ビヤクアは素早く静かに相手の懐に飛び込んでいたのだ。

強い衝撃に大きく仰け反って悶えるジャツカルダムドであったが執念がそうさせたのか体勢不安定のままに大鎌を振り下ろす。

「片腹です！ 大鎌は……こう使うんです!!」

だが、苦し紛れの一撃などビヤクアには届かない。

その切っ先は無手となった彼女の白羽取りで止められていた。それどころか矢継ぎ早に繰り出された蹴りによつて弾かれたジャツカルダムドは大鎌を手放して転倒すると言ふ施策を犯す。

顔を上げたジャツカルダムドが次に見た光景は月明かりを浴びながら首を軸にして大鎌を大回転させて力を溜めているビヤクアの姿だった。

「お覚悟をー」

真紅の双眸を煌めかせて、奪い取った大鎌を難なく扱う。

ビヤクアの気合に満ちた一閃がジャツカルダムドを薙いだ。

「シイ、イガアア、ア……アア」

「まだ動きますか……恐ろしい生命力です」

月の光がまるで演劇のスポットライトのように深手を負ったジャツカルダムドを照らす。

上半身を七割以上は袈裟切りにされ、左腕は辛うじて繋がっているが重力に揺らされて振り子のようにぶらついている。

「ならば徹底的に切り刻むまで！ 退魔七つ道具が其の壺、天狗の羽団扇！」

軽やかに地を蹴り、闇夜に跳躍したビヤクアは右手に羽団扇を握り、一気に戦いを終わらせようと畳みかけに入る。

「オン・カルラ・カン・カンラ！」

神通力を巡らせて天高く掲げられた羽団扇に四方八方から風が逆巻き収束していく。

やがて旋風は巨大な白い戦輪チヤクアムのような形を成していく。

「退魔覆滅技法——葬輪剣！」

ビヤクアが大きく羽団扇を振るうと白風の輪が剃刀のような切れ味を宿してジャツカルダムドに炸裂した。一拍の間を置いて、ジャツカルダムドは真つ二つになって崩れ落ちると黒い霧のように霧散する。

それどころかまるで連鎖するように残っていたダムド達も次々に黒霧へと変貌しては潰えていた。残されたのは静まり返った墓地と一人取り残されたビヤクアのみ。

「全て消えてしまった……なのでしょうか？」

『あーあー、少し遅かったですね。いやはや全く勿体のないことをしてしまいましたあ』

訪れた静寂に心がまだざわついているビヤクアの遙か後方から突然、別の声が聞こえてきた。

咄嗟に構えて振り返ったビヤクアが目にしたものは新たに出現した四体の異形の姿だった。夜の暗さ故にその姿がハッキリとは見えないが化神らしき姿の物もいる。

『しかも、よりにもよってえ最初のお邪魔虫が貴女というのは嫌がらせでしょうか？
ねえ、御伽装士ビヤクアさん』

「その口ぶりからするとお前はメタローですね」

『はあい♪ ポク、ナイトメアメタローと言うのです。仲良くしてくださいねえ？』

一団を率いている雰囲気を放っている案山子の顔を持ち、魔女帽子とローブを身につけた怪人が甘ったるい声色と口調で名を名乗った。

魔人教団——数多の並行世界の侵略を企てる高次元生命体メタローによって結成された者たちの一員であると。

「またですか。ムゲンにはどうやっても勝てないから侵略先の鞍替えでもしましたか？」

今夜の騒ぎに魔人教団が暗躍していることを知ったビヤクアは冷やかに数奇な運命で知り合った異世界の戦友の名前を上げて彼らに皮肉を飛ばした。

『残念だけど、今回は別件です。ちよつとした掘り出し物を見つけたので穢れという

独自の瘴気が存在しているこの世界ならダムドの脆弱さを少しは強化できるかと実験をしていたんですが……おかげで予定が丸潰れですよ』

「安心してください。このままお前たちも潰してあげますので」

強気な姿勢を崩さないビヤクアにナイトメアメタローの隣にいた翅を持つ化神が殺気を放って威嚇した。瞬時にビヤクアも臨戦態勢を取るが予想外なことに化神の目の前にピッチフォークのような杖を倒したナイトメアメタローがこれを宥めた。

『今夜のところは退散しますのでご安心を♪ これでも色々忙しいのでこちらの世界に構ってばかりはいられないですよ』

愛らしくもふてぶてしい態度を崩さないナイトメアメタローの目配せで彼女の背後にいた大柄な山羊頭の異形が瞳を妖しく光らせると彼らの背後に並行世界を渡る光の門が展開した。

「逃げる気ですか!？」

『はあい。忙しいって言ったでしょう? 今回は尻尾を巻いて逃げてあげますう』

ナイトメアメタローたちは躊躇うこともなく光の中へと消えていく。

迷いのない逃亡。引き際を見誤らない優れた判断とも言える。

「お前たちを見つけて、黙って見送るとでも思いましたか!」

『いい判断ね。アレ、放っておくと大変なことになるでしょうから』

メタロー達を追い掛けようと傍に控えさせておいた愛機ハヤテチェイサーに跨って追跡を開始するビヤクアの脳内に突然、謎の少女の声が響いたのはそんな時だった。

「いまの声は？ いえ、いまはそんなことより！」

閉じかける光の門を睨み、ビヤクアは愛機のスピードを全開に加速して間一髪で飛び込んだ。ビヤクアとハヤテチェイサーを強い光が包んでいく。

激しい閃光が収まった時、大荒れになった墓地にはお堂の屋根で気を失った女性以外は野良犬一匹いない、もぬけの殻へとなっていた。

※

目が眩むような光の中でビヤクアはハヤテチェイサーのハンドルを無我夢中で握り締めていた。

ここではあらゆる感覚が麻痺しているようだった。

濁流に飲まれたかのように身体の自由は効かず、ただ流れに押し流されていく。

「ふわああ……つと!？」

やがて、どこまでも終わりなんて無いように思えた光のトンネルが唐突に途切れて、再び視界には夜が広がる。

いつの間にか変身が解けていた沙夜は跨ったハヤテチエイサー共々どこかの高架下に弾き出されていた。

あわやコンクリート壁に激突する寸前でブレーキが間に合った彼女は大きな安堵の息を吐き出すと愛機から降りて用心しながら周囲を見渡す。

「……は無事に彼らが逃げた先へと辿り着けたのでしょうか？」

夜の高架下は幸か不幸か無人の静けさが広がっていた。

しかし、遠くでは電車の走る音や車のクラクションなどが聞こえてくる。

少なくとも人間が生活している気配が沙夜の心を平常心へと落ち着かせていく。

「ふふっ、安心なさい。貴女はちゃんと物語の舞台に招かれたわ。この並行世界の東京にね」

何か現在地が分かる物を探してあたりを歩いて回っていた沙夜の背後から、唐突に聞き覚えのない少女の声の囁きが鼓膜をくすぐった。

背筋に悪寒が走る感覚を振り切って、彼女は反射的に力を込めた腕を振るって背後を向いた。しかし、そこには誰もいない。アスファルトで舗装された道路がどこまでも伸びている。

「あら、ごめんなさい。少し戯れがすぎたかしら？」

「……貴方は誰ですか？ 何を知っているんです」

再びの呼び声に沙夜が警戒しながら視線を向けるとそこには一人の少女が街灯の隣に立っていた。

銀の髪に、透き通るような白い肌。

まるでおとぎ話に登場する妖精のような美しい少女だ。

蠱惑的な雰囲気醸し出す透けた薄手の紫色をしたナイトドレスに白く扇情的な肢体を包む。

両手に巻かれているミスマツチなチエーンの小物が少女を娼婦のようにも、虜囚のようにも見せる。

「私、ノーアンサーというの。以後お見知りおきを」

「どうも」

「まあ、そんな怖い顔をしたら折角の美人が台無しよ」

およそ人名とは思えない名前を添えて自己紹介した不思議な少女は優雅にスカートを端を摘み、お辞儀をした。どこか一方的とも思えるが友好的な態度を見せるノーアンサーに沙夜は態度を強張らせた。

彼女の纏う雰囲気になだぬ気配を感じ取ったからである。

何よりもこのノーアンサーは並行世界が戯言ではないことを知っている。必要以上に警戒することは無駄なことではないと沙夜の直感が告げていた。

「困ったわ。貴女とも仲良くお喋りをしてみたかったのだけれど、どうしましょう。そうだ……信頼の証として、良いことを教えてあげましょう」

ノーアンサーは嘆いたり、はしゃいだりとどこか作り物の雰囲気か漂う百面相を演じながらパンと手を叩いて、小首をかしげると信じられないことを語り始めた。

「望月沙夜。貴女が戦ったあの怪人たちの正体はダムド。本来は私が流れ着いたある世界に存在する生者を狙って襲う亡者のようなもの」

「なっ……!?!」

「ダムドの脅威はその数。だからこそ、墓地での貴女の戦いは正解だったわ。ダムドたちは群れを率いるボスダムドと呼ばれる格上のダムドを倒せば通常の個体たちも連鎖的に消滅するのよ」

その場になかったはずなのに墓地での戦いと彼女自身もその正体に疑問が尽きなかったダムドの詳細を滔々と告げるノーアンサーに沙夜は愕然とした。更に恐ろしいことは彼女は自分の名前さえも知っていた。

「どう? これで私のことを少しは信じてくれるかしら?」

「何故、そんなことを教えるんですかノーアンサー。貴女の狙いが私には分かりません」
「魔人教団……彼ら断りもなく私のいる世界にやって来て、ダムドを何種類か鹵獲していったのよ。それだけでなく一部の化神たちも傘下に引き入れて、この世界で良からぬ

ことを企てている」

氷のように冷ややかに、しかしどこかお気に入りへの演劇を楽しむかのような陽気なく声で先の戦いの背後で進行している悪しき者たちの動向を語るノーアンサー。

沙夜は続きを促すように黙って頷き、前髪の隙間から真剣な眼差しを見せる。

「彼らのことをそこまで嫌うつもりはないのですけれど、今回は少し調子に乗り過ぎているなど思ったのです。な・の・で♪ 今回は貴女たち仮面ライダーに助け舟を出したということですよ」

「ノーアンサー……貴女は味方だと本当に信じてもいいんですね？」

「敵ではないですね。今回の私はパトロンのようなものだと考えてくれれば結構よ」

無償の味方ではないよと暗に言っているようなノーアンサーの口ぶりに僅かに俯いて考えていた沙夜だったが気が付くと目の前から彼女の姿が忽然と消えていたことに気が付いて慌てて街灯に駆け出した。

「消えた……移動したような気配も何も感じなかった」

『頑張ってくださいね、仮面ライダー♪ 悪を挫き、怪物を討ち果たす、正義と自由の騎士！ せいぜい、私を失望させないでね』

冷や汗を一筋流しながら、身構えて周囲を窺う沙夜の脳内にノーアンサーの蠱惑的な声が響いた。

激励に聞こえたが彼女の纏う雰囲気からか虚ろな嘲りにも聞こえるそんな嘯き。

そして、それを最後に彼女がいた気配や痕跡は完全に途絶えてしまう。

「何はともあれ、進むしかありませんね」

何度か深呼吸を繰り返して、混乱する心を静めた沙夜はその場を移動することにした。

魔人教団。化神。ダムド。それにノーアンサー……誰一人として油断できない。

それに初歩的なことだが沙夜には戦うべき相手以上に不安が付き纏う問題があった。

「それにしても東京ですが……困りました。東京なんて大都会、こんな形で来るとは心の準備がまるで出来ていません」

沙夜は頭を抱えて大いに狼狽した。

地方出身に加えて、御伽装士の修行の為に殆ど京都の山奥で過ごしていた彼女にとって東京は雲の上のような存在だった。何なら、都会は怖い所という少し偏った古風なイメージさえ持っている。

異世界とは言え、いつかは観光で訪れたいと思っていた東京へやって来てしまった彼女は山積みの問題をどうやって解決していかうかと苦悩しながらも御伽装士としての心を研ぎ澄ませてこれからの方針を強かに思索し始めた。

※

夜の街を少々探索したのちに沙夜は無人のビルに忍び込むと屋上に上っていた。

理由は二つ。

安全が確保できる野営地の確保。

ハヤテチエイサーに取り付けたサイドバッグに最低限のサバイバルグッズが積まれているので数日程度の野宿は問題なく行える。財布も持参しているが出費は可能な限り抑えたいところという理由もある。

都会慣れした沙夜と同世代の少女なら漫画喫茶やネットカフェで一夜を過ごすなど普通のことだが残念なことに彼女にその発想はない。

もう一つはこの異なる東京の全容を知るためだ。

限りなく近いとはいえ差異がないとは決して言いきれない。

そして、その懸念は的中した。

「なんですか、あれ……？」

東京の夜景は煌びやかで沙夜も感激を覚えた。

しかし、明らかな異物を見つけて彼女は動揺して表情を曇らせる。

この東京には東京タワーとスカイツリーに続いて第三の塔が我が物顔でそびえてい

た。

禍々しいオーラを放つ漆黒の巨大な螺旋の塔がそこにはあった。

■邂逅と逃避行

例え突如轉移したとしても謎の塔が聳えていたとしても、東京は東京だった。夜の帳が降りても眠らない大都市は、時計の針がそこそこ高くなつた現在も人がひつきりなしに行き交っている。日がとつぷり暮れた街並みを彩る騒がしい学生や酔客の間を、朔月はしめは当てもなく彷徨っていた。

「……………うえくん。楽しそうな物は沢山あるのに……………」

日本で最も賑やかな都市と言つて差し支えない東京は遊び場も豊富だ。げっそりした表情で歩道を行く朔月の目の前には飲食店やゲームセンターなどが建ち並び、夜だというのにどこも賑わっている。

遊びたい盛りである朔月なら誘蛾灯に群がる羽虫のように釣られてもおかしくはない……………本来、なら。

「お財布がないよ〜」

かくりと項垂れ朔月は嘆息した。今現在、彼女の持ち物は胸から下げているマリールドールとブレザーのポケットに入っていたスマートフォンだけだ。肝心の財布は教室

机に下げた通学鞆の中。つまりローゼンメタロー退治に慌てて外へ飛び出した朔月は持つて来れていなかった。まさかこのような事態になるとは夢にも思わなかったのだから仕方ないが、それでも朔月は過去の自分を嘆かずにはいられなかった。

「マジほんと、どうしよー……寝るとこもないし……」

家庭に問題のある朔月は友人宅やネットカフェ、漫画喫茶を渡り歩くこともあった。それ故外泊には慣れていて。なのでスタンプの溜まった全国支店共通の会員証なども持っているのだが、その会員証も財布の中ではどうしようもない。

スマホの中に電子マネーが入っていればまだ良かったのだが、纏まった金を用意しづらい上に銀行口座も持つていない朔月は特に契約などもしていなかった。その後悔も嘆きに加わっている。

一文無し。それが世界を股にかけたことよりも重くのし掛かる現在の一大事だった。

「はあ……」

取り敢えず歩き疲れた朔月は、植え込みの縁を椅子代わりにして休むことにした。近くでは何人かの男女がスマホを手に暇そうに立っている。待ち合わせをしているようだ。これから飲みにも行くのだろう。それを横目にして朔月は膝を抱える。

「これはこのまま野宿かな……」

流石の朔月も野宿をした記憶は幼少のみぎりのみだ。ご飯代を使うという発想も友

人の家に転がり込むという発想もなく家出した過去の思い出。公園のベンチの上で寝転がって夜を明かしたあの頃を思うと、当時はよく無事でいられたものだと思えば肝が冷える。今同じ事をしようとするればどれだけのリスクがあるのかは分かっているが、このままでは背に腹は代えられず……。

「はあ……」

「ねえ君」

何度目になるか分からない溜息をついていると、ふと声をかけられた。沈鬱に俯いていた顔を上げると、そこには髪を金髪に染めた若い男の顔があった。アクセサリーや腕時計を身につけて、如何にも遊び慣れているという風をアピールしている。

「いくらっ？」

「はあ？」

軽薄そうな笑みを浮かべてそんなことをたまった若者に、朔月はポカンと口を開けた。しばらく呆けた後、自分に何を求められているのか理解して顔を赤くした。確かに朔月は夜に遊び歩くこともあるが、そういうことは未経験だ。

「え、いや、その……わ、私そんなじゃないですから！」

慌ててその場を離れようと立ち上がる。だが立ち去ろうとする朔月の腕を男は咄嗟に掴んだ。

「そんなこと言わずにさあ。三万は出すよ。結構いいでしょ?」

男の強い力が手首を絞める。

「ひっ……間に合ってますからあ!」

恐慌に駆られた朔月が必死に引つ張れば、どうにか腕は外れてくれた。そのままの勢いで逃げ出す。男の怒ったような声がかかったが、振り返ることなく疾駆した。

「はあ、はあ、はあ」

しばらく走っていると周囲からはいつの間にか人氣が無くなっていった。どうやら繁華街からは外れたらしい。我に返った場所は、どうやら公園のようだった。夜の心地よくも寂しい静けさが辺りを包んでいる。

「はあ、ふう……もう、ほんとヤダ……」

あんまりな出来事の連続で、疲れたようにして朔月は青いベンチの上に蹲った。このままここで寝てしまおうか。そんな考えすら浮かぶ。危険なことは承知の上だが、しかしあんな事があれば人混みの中に戻ろうという気も起きなかった。

夜風に背筋を震わせるそんな朔月の耳に、何か騒がしい音が届いたのはその時だった。

「な、なんなんだ君たちは!」

「うわあっ!」

男性の叫び声。その声音と内容に秘められた緊迫感が朔月を起き上がらせる。

視線の向けた先は、声の主らしき中年男性。エコバッグを抱え、どうやら買い物帰りのようだ。そしてもう片方の腕では少年の手を繋いでいる。

恐らくは小学生くらいのも、あどけないとすら言えるほど幼い少年。もうすぐやんちゃ盛りはそろそろ鳴りを潜め始めて大人への階段をゆつくりと昇り出す、しかしそれまでにはまだ時間のある無邪気なお年頃。普段は澆刺とした元気を漲らせているであろう顔は、今は恐怖に歪んでいた。

二人を囲う、異形の集団に。

「つ、ダムド!?!」

急に現われた見覚えのある奴輩に、朔月の意識は急激に研ぎ澄まされた。

街灯の明かりに黒光りする身体とイナゴそっくりの仮面を被った人型は、二人を分厚く囲っている。二人が逃げだそうとすればそれを追いかけて退路を塞ぐ、まるで獣の狩りのような光景。そしてそれを指揮するのは、また別種の異形だった。

水を塗り固めたかのような、透き通った身体。右腕は同材質のうねうねと蠢く触手を束ね、もう片腕は黒いカバーのかけられた無骨とすら言える機械となつている。蛍光灯の光を取り込んで淡く輝くその様相は、暗闇に浮かぶ幽霊のように不気味だった。

「あれは、ダムド、じゃない?」

朔月は知らない。それが集いし穢れが意思を持ち、人を喰らうようになった怪異——化神であることを。

既知の外な存在に面食らった朔月だが、その目の前で状況は決定的に変化する。ダムドの内一体が、男性の手から少年を分捕ったからだ。

「わあっ!?! おじさん!」

「章太郎! くっ、その子を返せ!」

男性は買い物袋を捨て手を伸ばすが、他のダムドの妨げられて届かない。ダムドは化神の前まで少年を連れていき、まるで献上するかのように手渡した。

『ふっ……丁度良いわね。これなら奴も気に入るでしょう』

「放せ、放せよおっ!」

少年は滅茶苦茶に暴れて逃れようとするが、異形の触手はそんな少年の肢体を縛り付けて締め上げる。一本を口枷代わりに啣えさせられた少年は、悲鳴すら満足に上げられなくされる。

「んむーっ!」

『ふふっ、慌てなくてもいいのよ。このバケミツキ様が……もうすぐ連れて行ってあげる。とても良いところよ』

妖しげに艶めいた口調で話すクラゲめいた異形、バケミツキは少年を捕らえるとその

場から踵を返す。ダムドの群れもまたそれにゾロゾロと続く。

「ま、待ってっ!」

男性が追いつがる。が、ダムドの一体に突き飛ばされてしまう。勢いよく倒された男性は腰を地面に強打して、痛そうに呻いて立ち上がれなくなってしまった。

「だ、大丈夫ですか!?!」

朔月は慌てて駆け寄る。だが男性は苦痛に顔を歪めながら少年を連れ去った奴輩を震える手で指差した。

「わ、私のことはいいいから……章太郎を、章太郎を……」

「……分かりました。ここで必ず連れてくるので待つていてくださいー!」

少し迷う素振りを見せたが、朔月は男性の言葉に頷いた。相手がダムドなら、自分が追うべきだ。

男性をその場に残し、朔月はダムドと、それを率いるバケミツキを追う。人気の無い方へ行進する集団は見逃しようがない。すぐに追いつき、朔月はその背中に怒鳴った。

「待つてー!」

ピタリと、異形の集団が足を止めた。そしてダムドの群れを割るようにして、少年を縛り付けたままのバケミツキが姿を現す。

『あら……可愛いお嬢さんがこんな夜更けに何用かしら?』

「その子を返して。あのおじさんの、大切な人らしいから」

家族、と断言できるほどの確信は持てないながらも朔月はそう感じ取っていた。そんな二人を引き裂くなど、あつていい筈がない。

『ふうん。嫌だ、と言ったら?』

「だったら、力尽くでも!」

そう言える手段が、今の自分にはある。

朔月は制服のブラウスの下からマリードールを引き出した。ネックレスとなった白い女神像を掴み取り、細い鎖を力任せに引き千切る。瞬間、淡い光が集まって朔月の腹部に黒いベルトが現われる。

「変身!」

《《 Silver 》》

《《 戦いは止まらない 何故? 》》

運命は変わらない 何故? 》》

バックルへマリードールを叩きつけ、朔月は銀の光に包まれる。夜の中で映える光が消えたそこには、彼女の戦闘態勢である銀甲冑が存在していた。

得体の知れない異界の地に、仮面ライダー銀姫が降り立つ。

『!、ふうん、仮面ライダーだったのね』

「んんっ!？」

バケミツキが驚いたかのような仕草を取るその手の中で、心なしか少年が瞳を輝かせたように見えた。それに気付かず、銀姫はベルトの右腰を叩き右手に細剣を呼び出す。

「貴女が何者か知らないけど、放つてはおけない!」

夜闇の戦は、銀姫の一閃が開幕させた。バケミツキに迫る剣撃は、しかしダムドが壁となつて阻まれる。

「くっ、邪魔!」

煩わしそうにダムドの一体を裏拳で仕留める銀姫。それで黒い霧となつて散ると知っていたかのように慣れた動きにバケミツキはその正体を悟る。

『なるほど。どこから湧いたのかと思つたら……この悪霊たちと同じ巢の生まれなのね』

「同じに、して欲しくないけどっ!」

銀姫が銀刃を振るう度、ダムドは霧に還っていく。だがダムドもその数を生かして銀姫に爪を突き立てる。だがそのほとんどは、銀甲冑に阻まれて微かな傷をつけるだけに終わっていた。

「やあっ!」

ついにバケミツキへ迫つた銀姫はその細剣を上段へ振り上げる。が、バケミツキは慌

てることなく機械となつてゐる左腕を突き出した。

『ふふつ、電気の味を知りなさい』

「えつ、きやああつ！」

その瞬間、夜の闇に稲光が迸つた。機械から発せられた紫電は甲冑を貫き、銀姫は感電して倒れ伏す。

「うっ……くっ……それ……」

『ふふつ。今頃気付いた？』

痺れる身を起こし銀姫が見上げる左腕。黒いプラスチックのカバーと先に覗いた微かな二つの金属片は、銀姫にも見覚えがあつた。実物は知らずとも、テレビドラマなどでは出番がある――。

「スタンガンっ！」

『ご名答。ご褒美に、それ！』

「う、あうううっ！」

再び電撃が奔る。再び打たれた銀姫は地面に横たわりながら魚のようにその場で跳ねた。それを面白可笑しそうにバケミツキは嗤う。

『ふふふつ。人間の狂い悶える動きはいつ見ても可笑しいわあ。そのまま躍り食いちゃいたいくらい……』

「むーっ!」

『ん? ああ君はいいのよ。他の使い道があるから』

スタンガンの先で火花を爆ぜさせながら嘲笑うバケミツキは、しかしもう片手の中で暴れ始めた少年に気が逸れる。喰われることに怯えたと思つたバケミツキは締め付けを強めることで収めようとする。しかしその瞬間を狙い澄まし、銀姫は感電の痛みを堪え立ち上がった。

「つ、ああああ!」

銀姫は、朔月は普通の女子高生だ。痛いのは嫌いで、苦しいのも御免だ。

それでも目の前で少年が苦しむ方が辛いと思う程度の良心はあつたので。

痺れる身体を無理矢理前に押し倒し、まるで倒れる寸前を繰り返すようにしながら銀姫は走つた。

『ふうん? でも愚かね。電気より速い訳ないじゃない』

駆け出した銀姫に気付いたバケミツキだが、慌てることなくスタンガンを持ち上げた。その先端部を向け、三度の紫電を放つ。

内心では大いに嘲っていた。二度電流に打たれても学習しない、突進しか能の無い愚物。何一つ障害となり得なかつた手応えのない雑魚。そう嗤いながら勝利を確信し、その甲冑の下の柔肉の味を想像して舌舐めずりしていた。

「!、い、まー!」

だが銀姫はすっかり学習していた。相手の紫電が迸るタイミング——それを見計らい、手にした細剣を投げた。

『えっ!?!』

細剣は銀姫とバケミツキの中間地点に放り投げられる。放たれた雷撃は、その銀刃の中へ吸い込まれ。

『しまった——!?!』

避雷針。そんな言葉がバケミツキの思考に浮かぶより早いかな否か。

ワニンチ距離まで迫った銀姫が、拳を振り上げる。

「や、あぁーっ!!」

『ぐうっ!?!』

鈍い音と共にバケミツキの透き通った表皮へ鉄拳が突き刺さった。クラゲのような肉体はその見た目通り柔く、銀の拳を受け止めきれずに容易く歪む。緩んだ触手の拘束から、銀姫は少年を引き剥がした。

「君、大丈夫!?!」

「ぶはっ! ……お姉ちゃん、仮面ライダー!?!」

安否を確認する銀姫。

だが少年はそれよりも、自分を助けた戦士に対しキラキラとした瞳を向けた。

「え、ああ、うん。そう、だけど……何で仮面ライダーのことを……」

予想だにしていなかったリアクションに銀姫は面食らう。取り敢えずは大丈夫そうだが、それにしても何故自分たち以外は知らない仮面ライダーの名前を知っているのだろうか。

戸惑う銀姫だが、視界の端から鞭のようにしなる触手が迫るのを見て慌てて少年を抱えながら身を屈める。数cm上を過ぎ通った触手を忌々しそうに引き戻し、バケミツキは怒りの視線を銀姫に注いだ。

『痛いじゃないの……！ その子を返しなさい！』

「嫌に決まってるでしょ！」

『そう……！ なら……！』

毅然と睨み返す銀姫に苛立ったバケミツキは、触手の右腕を天に掲げる。それに呼応するかのように影の落ちた地面から、染み出すようにして大量のダムドたちが現われた。

その数——優に先の二倍。

「……やばっ」

ダムドの相手は慣れている銀姫だが、流石にこの数を、しかも少年という護衛対象を

抱えてまで捌く自信は無かった。他のライダーとの共闘なら十分可能だが、今は一人だ。

「――逃げようっ！」

だから銀姫が取った選択は、その場からの逃走だった。少年を抱きかかえ、銀姫はその場から逃げ出す。

『逃がすわけ無いでしょう！』

当然、バケミツキは追う。ダムドを猟犬のように放ち、夜闇の中のデッドヒートが始まった。

「お、お姉ちゃん……」

「くっ……」

少年と共に逃げる銀姫に、しつこく追いつがるダムド。それらを引き連れたまま人混みに飛び込む訳にもいかず、自然と退路は人気の無い方向になる。

どうにか撒ける場所はないか……そう彷徨っている内に辿り着いたのは、明かりのない病院らしき建物だった。

迷ってる暇はないと動いていない自動ドアを潜れば、そこは無人の受付。もうどこも閉院時間なのはそうだろうが、床には埃が厚く積もっており、しばらく人が入った様子は無さそうだった。

「廃病院……かな。でも人がいないのなら……」

夜の病院は一層不気味だったが、背に腹は代えられない。内心に湧く恐怖に目を瞑りながらそのまま廊下を駆け抜ける。だが、背後から反響する足音たちに歯噛みした。

「まだ追ってくる……うつ！」

そしてその音は、前からも聞こえてきた。別の入り口から先回りさせたようだ。挟み込まれた銀姫は近くにあった階段を昇るしかない。

「はあ、はあ」

「お姉ちゃん、大丈夫……？」

「大丈夫、だけど……！」

走っている内に息は上がってきた。しかしそれでもライダーの力が与える身体能力はスタミナも向上させている。走力自体はまだしばらくは持つ。だが……。

「もう、行き場が——！」

進退窮まっていた。

階段を昇って追跡の手を逃れようとしていた銀姫だが、遂に前後を完全に挟まれ近くの病室に逃げ込むしかなくなる。放棄されたパイプベッドだけが並ぶ殺風景なその部屋に入るしかなかったとはいえ、そこがどん詰まりであることは明らかだった。

逃すはずもなく、勝ち誇ったバケミツキがダムドを引き連れ入室する。

『ふうん。鬼ごっこもここで終わりよ』

「くう……」

降ろした少年を背後に庇いつつ、銀姫は悔しげに臍を嘔む。背後には割れた窓。しかしそこから覗く視界は高い。銀姫の力なら飛び降りること自体は叶うだろうが足を挫くかもしれないし、庇つたとしても生身の少年が無事では済まない。

戦うしかない——この狭い場所で、少年を守りつつ？

無理だ。

『さあ、その子を渡しなさい』

「誰、が……！」

言いつつも、銀姫は。

ただただ絶望的な想像ばかりを脳裏に描いている。

『殺してはしないわよ。その子はね。……でも今渡せば、苦しい思いも少なく済むわよ？』

流石にその甘言に釣られることはしないけど。

それでもやはり、希望が見えないのは確かだ。

「……………」

無言で構えるが、それもどこか力ない。それでもせめて最後まで守ろうと拳を握る。

無力な自分にはそれしか出来ないから。

『ふふつ、まだ戦う気？ 絶対勝てないのに』

分かってる。五月蠅い。自分が一番知っている。

自分は無力だ。身勝手な親に翻弄され、ちっぽけな家庭から抜け出す術すら持たず、友人たちとのぬるま湯な日常を抛り所にして、そんな自分から変身する力を分不相応にも願って、その所為で意味の分からない戦いに巻き込まれて、そこで自分が如何に無価値か思い知らされて――、

だからここで訳も分からず無意味に死ぬのだと。

自分が分かっているのに。

「そんなことない！」

それを否定する声が響いた。

背後から響く幼い声が、銀姫の抱いた絶望を否定する。

「仮面ライダーは、絶対負けないんだ！ 追い詰められたってやられそうになったって、最後まで諦めずに、絶対絶対怪人を倒すんだ！ だっておれは、知……知……るんだ！」

「……知ってる？ 君は、一体――？」

そう、少年は知っていた。

だからこそ、訪れる。

ヒーローの窮地ピンチ——しかしそれもまた、

ヒーローの登場する、絶好の好機チャンスなのだ。

「ハイヤア——!!」

割れた窓から風が吹き込む。

穢れを悉く吹き払う、気高き白疾風が。

■銀と白

バケミツキとダムドの一団によつて廃墟の病院に追い込まれた銀姫と章太郎。

逃げ場もなく、多勢に無勢の窮地に陥つた彼女たちと怪人たちの間に割つて飛び込んできた白疾風の正体は紛れもなくハヤテチエイサーを駆るビヤクアだった。

事の詳細は朔月がナンパ男から逃れて人気のない公園に辿りついた頃にまで遡る。

「まさか東京で野宿することになるとは思いませんでした」

謎めいた螺旋の塔が聳える東京に不安を募らせながらも、土地不案内な場所を夜に動きまわるのは危険と判断した沙夜はビルの屋上で夜を明かすつもりで手際よく準備をしていた。

「ふーん……貴女つて意外と図太いのね。枕が変わつただけで眠れないような顔をして
いるから驚いたわ」

「……ッ!? またですかノーアンサー！ 今度は何の用で？」

持ち込んだ寝袋を広げようしていると気配もなく背後から囁かれる甘ったるい女の声。臨戦態勢とまでは行かないが険しい表情で沙夜が後ろを振り向くとそこにはナイ

トドレスを纏ったあの美少女が立っていた。

「これ、銀姫に渡しておいてちょうだい。無一文につけ込まれて悪い男の食い物にされていたんじゃないか、元も子もないからね」

「え、あの……銀姫って誰ですか？」

ノーアンサーがにべもなく手渡したのは持ち主不明の通学鞆だった。

もちろん沙夜自身の物でもないが目の前のナイトドレスの少女があまりにも自然に差し出してくるので咄嗟に彼女はノーアンサーに持ち主の詳細を聞くのもあやふやに通学鞆を受け取ってしまう。

「きつと会えるわ。それじゃあね。私は確かに貴女に預けたから。よろしくね望月沙夜」

「待ちなさいノーアン……サーって……ああ、全くなんなんですか一体！」

言いたいことを好き勝手に伝え終えると彼女はまた幻のように忽然と消えてしまった。

破天荒な上司には慣れてはいるがそれとはまたベクトルが異なる傍若無人さを見せるノーアンサーに穏やかな性格の沙夜も耐え難いものがあり珍しく声を荒げた。

しかし、受け取ってしまった以上は持ち主に必ず届けなければならぬと頭を冷やしてジツと鞆を見つめた。

「うう……本当にすみません。どなたのものか存じませんがちよつとだけ、失礼します」
 限なく見回してみたが外側に持ち主に繋がる手掛かりは皆無だ。

なので沙夜は罪悪感を覚えつつ、通学鞆のフアスナーを開いて中身を改めることにした。壊れ物がないか慎重に物色をしていくと教科書や可愛らしい文房具といったものから洒落な小瓶に入った香水などが確認できた。

「たぶんですけど、私と同じ高校生ですよね？ あ、これ……学生証？」

教科書と筆箱以外は御守衆の仕事道具ばかりが入っている面白みのない自分の通学鞆とは正反対な輝く盛りの女子高生らしさに溢れた中身に宝箱を漁るような高揚感を沙夜が密かにか感じていると顔写真付きの学生証を見つけた。

「更科、朔月」
さらしな はじめ

学生証には垢抜けた雰囲気の見目美しい少女の写真が付いていた。

嘯み締めるように、刻まれた名前を呟く。この通学鞆の持ち主、更科朔月——まずは彼女を探すことから始めよう。

魔人教団や彼らと結託したと思われる化神たちを止めるための足掛かりを見つけて少しだけ沙夜の心に安堵が芽生えた時だった。

地上の一角で謎の激しい閃光が闇夜を照らした。

「いまのは!?! どうやら、ただ事ではないようですね」

慌てて屋上の隅まで駆け寄って目を見張ると更に紫電が断続的に夜の暗さを晴らす。沙夜が耳を澄ませば微かに悲鳴のような声も風乗って流れてくるではないか。

「オン・カルラ・カン・カンラ」

少なくとも不良やチンピラの喧嘩程度の物ではないと察知した沙夜はブレスレットに偽装した白鴉の怨面を手を取った。

「白鴉の怨面よ、お目覚めよ。ハッ！」

言霊を受け小物サイズから大きく変化した怨面を被りながら、沙夜は迷いなくビルの屋上から飛び降りる。

「クウ……ア、ア、ウアア——……——変身！」

夜風を切って地上へと落下する沙夜の素肌には赤く妖しげな無数の蛇紋様が浮かび上がり、怨面から注がれる超常の力と怨念無念の疼きを受け止めて、彼女は凜とその二文字を叫んだ。

白く輝く旋風を纏って望月沙夜は超人へと姿を変える。

御伽装士改め、仮面ライダービャクアへと。

「いきますよ、ハヤテ！」

地面へ激突寸前にビル壁を蹴って跳躍したビャクアは呼び出した式神ピークル・ハヤテチエイサーに軽業師のように跨って、不穏な気配を辿ってあの廃病院へと辿りついた

のだった。

※

白き二輪の双眸ライトから溢れる光が群がるダムドたちを睨んでいた。

荒馬の嘶きのようなエンジン音がバケミツキを威嚇していた。

鉄の駿馬に跨る仮面の騎兵は片手に朱色拵えの羽団扇を握り、静かに闇の住人たちに立ち塞がる。

「あ、あなたは……？」

あまりにも突然のことに銀姫は——朔月は無意識に両手を握り締めて身構えた。彼女の知る限り、バイクは空を飛びはしない。

それなのにこの白い天狗か武者のような恰好の人は地上から三階以上の高さはあるこの病室にバイクに乗って跳び込んできたのだ。困惑せずにはいられなかった。

『ふうん、この忌々しい気配……御伽装士ね』

「えっ、おとぎ……どうし？」

妖艶な佇まいで舌打ちするバケミツキ。

追い詰めた獲物を前にして勝ち誇るような優越感に若干の憎悪が混じる。

無言のビヤクアに代わって背後にいた銀姫がバケミツキの発した場違いな言葉に首を傾げた。

『けれど愚かね。無策で真正面から私の前に姿を晒したことを悔やみなさい!』

「つ……あぶない!」

攻撃動作に入ったバケミツキを見て、銀姫が反射的に声を上げた。

彼女の脳裏に蘇る苦痛と痺れ。

何よりも恐ろしいのは攻撃が来ると分かっているからでは防御も回避も難しい速さ。

しかし、バケミツキの漆黒の機械腕は無慈悲に持ち上がり、先端から紫電が放たれようとする。

「カンラー!」

『ぐう、きやあああああ!』

紫電が真っ直ぐにビヤクアを貫通するよりも前に朽ちた病室に突風が巻き起こった。

退魔七つ道具の壺・天狗の羽団扇の一振りから生まれた神通力を込められた旋風がバケミツキとダムドたちをまるでミキサーに放り込んだように掻き回す。

確かにバケミツキの雷撃は速かった。だが、そこには技の起こりという隙が存在する。

羽団扇から生まれた突風はそんな雷電よりも無縫であった。

「失せなさい！ ハヤテ任せます！」

【■■■■——!!】

一喝するような叫びと共にジャクアがもう一振りと羽団扇を振るうとバケミヅキたちに叩きつけられた暴風が寂れた病室の壁ごと異形たちを吹き飛ばした。

更には追い討ちとばかりに自走を始めたハヤテチエイサーがバケミヅキをピンポイントに狙って突進し、完全に廃病院の外へと追い出すことに成功した。

「す、すごい風!? 君、平気!?!」

「うん! それよりすげー! また知らない仮面ライダーが出てきたあ!!」

「は、はは……男の子って無邪気でいいよね」

一気を抜いたら巻き込まれて明後日の方向へと吹き飛ばされそうな強風に銀姫は咄嗟に章太郎と抱きしめてその身を案じる。だが、章太郎の方はというと新たに現れた謎の仮面ライダーに先程まで絶体絶命だったことも忘れて、興奮気味に目を輝かせていた。

「あ、あの……!?!」

小旋風が収まったところで銀姫はジャクアのそばに歩み寄ろうとして——ぎこちなく足を止めた。

不意に彼女の心に重く纏わりつく泥のような不安がこみ上げる。

銀姫の世界にとって、いや朔月の認識の中では仮面ライダーとはどんな願いも叶えら

れるという夢のような玉座を狙って争い合う少女たちの呼び名だ。

七人が最後の一人になるまで殺し合う凄惨な遊戯。

殺人に忌避感を抱き同盟を結ぼうと考える者たちもいるが誰しもが譲れない願いを持っている。捨てることのできない欲望が悪魔の囁きとなつて少女たちの背中を押し、自分以外の他人を欺き、騙し、陥れ、命を奪おうと画策する。

毎夜繰り返される地獄のような祭典に足を踏み入れてしまった朔月は何度となく身も心も引き裂かれるような思いを味わってきた。

「……………」

だから、咄嗟に体が強張る。

助けてもらったお礼を言おうとした舌が何も言えずに渴いていく。

あなたは誰と問いかけるだけの簡単な言葉が固く閉じた口の中を詰まらせる。

あなたは敵なの、味方なの？

知らないという恐怖が朔月の心を鑢やすりでなぞるようにいたぶる。

分からないという不安が銀姫の四肢を最悪の展開に備えて身構えさせた。

「ぐ、ぐ無事ですか！ らめんなさい、少し気合を入れて風を起こし過ぎてしまいましたあ」

「ふえ？」

銀姫がなんと声をかければいいのかとまごついてみるとビヤクアの方が先に動きだした。思わずビクリと肩を震わせた銀姫だったが目の前の白武者は上擦った声で謝りながら何度も深々と頭を下げてきた。

予想していなかったリアクションに銀姫は鉄仮面から露わになって口をポカんと開けて驚いた。そんな彼女にビヤクアは何度も平謝りをしながら、しゃがんで目線を合わせてから章太郎にも謝罪の言葉を伝える。

「君も風で飛んできた小石かガラスとかで怪我をしてないでしょうか？ 怖い思いをさせてしまつてごめんなさい」

「平気だよ！ それよりお姉ちゃんも仮面ライダーだよね！ なんか響鬼みたい！ 名前は何？ なんていうの！ おれは藤堂章太郎っていうんだ」

「よかった。ライダーのことをご存知なのですね。私は御伽装士……じゃなかった。仮面ライダービヤクアと言います」

怪人に襲われた恐怖よりも知らない仮面ライダーに会えた。助けてもらった。もう一人いた。というスーパーコンボを体験して爆発したライダー愛の賜物か章太郎はぐいぐいとビヤクアにも話しかけていく。けれど、そんな子供の無邪気な行動力のお陰で病室の空気は僅かに緊張感が解れた。

「あの！ 私は仮面ライダー銀姫。助けてくれてありがとう」

「いえ、そんな。私なんて銀姫さんが章太郎くんをここまで守つてあの数を相手に奮戦し続けてくれていたお陰で間に合っただけのこと……ぎんき？」

銀姫は勇気を出してビヤクアに声を掛けて名を明かした。

なんとなくだけどこの子は敵じゃないと信じてみようと思つたのだ。

すぐに返つてきた穂和で落ち着いたビヤクアの言葉に銀姫は内心で何とも言えない嬉しさを噛みしめた。

「え……あなた銀姫さん？ ええつ、銀姫さん!？」

「うん？ そうだよ。それがどうかした？」

けれど、銀姫が安心したのも束の間に彼女の名前を聞いた途端にビヤクアの様子が変わった。

「初対面で失礼ですが銀姫さんが更科さんで間違いないですか？ その、更科朔月さんでよろしいんですよね？」

「ひゃい!？」 どうしたの急に？ あと、ごめん……できれば名字よりも下の名前で呼んで欲しいかな？ 自分の名字、好きじゃなくて」

突然両手をガシつと掴まれて食い入るような勢いで尋ねられるものだから銀姫は思わず頬をひきつらせてたじろいだ。赤い双眸を備えた白い鴉面で密に迫られると中々に怖いものだ。

それに更科と呼ばれたことがチクリと彼女の心に不快感を覚えさせる。

身勝手に自分のことを生まれてこなければ良かったとまで言い放った両親と同じ名前で呼ばれること、それは朔月にとっては十分過ぎるほどの責め苦だった。

「あ……不躰にすみませんでした。では朔月さん、あなたのことを探そうとしていたんです。ノーアンサーという女からあなたの通学鞆を預かっていました」

「へ？ そうだったの!？」

「はい。こんなに早くお会いできてよかったです」

「よかったあく私の方こそ見つけてくれてありがとうございますとようだよ」

思ってもみなかった報せに銀姫は嬉しさのあまりビヤクアに抱きついた。

互いの鎧同士が擦れる歪な音が響くがそんなことはいまはお構いなしだ。こんなスキンスリップは仲の良い友人たちとも滅多にやらないがここに至るまで様々なトラブルや痛い思いもしてきた朔月には右も左も分からない異世界で信用できる味方と自分の通学鞆が見つかったことは嬉しい出来事だった。

「キシヤアアア!!」

けれど、嬉しいことは長くは続かない。

朗らかな空気を壊すような亡者の呻きが再び闇に木霊したと思うと銀姬たちがいる病室に目掛けて無数のダムドたちの第二波が押し寄せてきたのだ。

「あいつらまた……!」

「お互いに色々と話し足りませんがまずはこの場を切り抜けましょう」

「そうだね」

唇を真一文字にキュツと強く結んで少女二人の仮面ライダーは並び立つ。

敵意をぶつけられることも、遅かれ早かれ傷つけ合いことを憂う必要もない味方であるビャクアの存在はここまでの戦いで決して疲れ知らずというわけではない銀姫に活力を漲らせた。

病室に侵入してきたダムドたちを徒手空拳で殴り抜き、ビャクアと手分けして押し返すと一転して閑散とした廊下へと飛び出した。

「露払いが私か! 銀姫、あなたは章太郎さんと私の背中をよろしくお願いします」

「! 分かった」

廊下は思っていた以上にダムドたちで溢れていた。

外に撥ね飛ばしたバケミツキか新手が使役しているのかは定かではないが群のボスを仕留めなければこちらが不利になる一方だと判断したビャクアがすかさず一つの陣形を提案し、銀姫も頷いた。

「退魔七つ道具が其の参——雲薙ぎの大鎌!」

化神退治ならば自分の役目だと奮起したビャクアの手には蒼鋼の武骨な大鎌が握られ

ると廃墟の屋内には鋭利で冷やかな三日月が顔を出す。

「ハアアア——！」

「あの子すごい……よし、私も！」

通常の建物よりも幅も高さもゆとりのある廃病院の廊下を縦横無尽に鎌刃が乱舞する。

本能のままにビヤクアに突っ込んでいくダムドたちは次から次へと斬り伏せられていく。その光景はまさに草刈りだ。生い茂った雑草を纏めて片付けるようにビヤクアは巧みな体捌きで操った大鎌で敵の集団を薙いでいく。

「はあっ……… やあっ！」

一方で銀姫も果敢にダムドを迎え撃つ。

いくら広範囲の攻撃手段を持っていると言ってもダムドの数は夥しく、討ち漏らしや他の通路を用いて回り込んでくる勢力がいる。

そんなダムドから章太郎やビヤクアの背中を鉄壁の防御で守りながら力強い拳打やキレのある蹴りで応戦していく。求められる技量は高く、実行するのは至難な役目を銀姫は見事にこなしていく。

「このっ！」

「助かりました。頼りになります」

「お互いさまだよ。ツ……ビヤクア、前からまた」

「お任せください！ ハイヤア！」

仲間のダムド達を囷に鎌刃の嵐をすり抜けてビヤクアの背後を取ったダムドを銀姫がすかさず殴り飛ばす。背中に頼もしい仲間の存在を感じながらビヤクアは大鎌を風車の如く振り回すと両壁のコンクリートごと前方に残ったダムドをまとめて撫で斬つた。

「かなり数が減ってきたね」

「はい。このまま一気に脱け出して、群の頭目を……えつと、ボスダムドでしたっけ？」

あれを倒さないと」

「そんなことまで知ってるの？」

「まあ、はい。あのノーアンサーという人が色々と一方的に話していかれたので」

背中合わせで阿吽の呼吸の大立ち回りとはいかないがそれぞれの長所を活かし合つた即席のコンビは次から次へと湧いて出てくるダムドを蹴散らしながらどうにか二階にまで進むことができた。

勝利への糸口が見え始め、二人の間にはお互いの事情を話し合える程度の余裕も出て来た時だった。悪意は思いもよらぬところから忍び寄り、足元を掬うのだ。

「それに魔人教団がこのダムドを率いて私の世界に!? なにっ……うあ、ああ!？」

「ビャクアー！」

「ビャクアのお姉ちゃん!？」

割れた窓の外から見覚えのある半透明な何本もの触手が伸びてきたかと思うとビャクアの肢体に絡みつき、彼女を外の闇の中へと飲み込んでしまったのである。

「キシヤアアアア！」

「このっ！ 章太郎君、私から離れないで！」

目の前から連れ去られたビャクアに焦りと心配を覚えながら、銀姫は気丈に章太郎と守りながら生き残っていた屋内のダムドたちを打ち倒す。

再び章太郎を抱えて階段を駆け下りて、エントランスからビャクアを助けに向かおうとしていた銀姫にはまるでゾンビ映画のように荒れた敷地内を徘徊するダムドたちの姿が広がっていた。

「まだこんなに……どうすれば」

僅かな共闘で何となくだがビャクアは自分よりも戦い慣れているんだなという実感があつた。しかし、いくら彼女でもあれだけの数のダムドを一人では相手にできないのは明白だ。

すぐにも助けに行きたいが子供の章太郎を連れてあの敵の密集地帯に飛び込んでいくんだなんてそれこそ無謀窮まりない。

どう行動すればいいのか、最適解が見出せずに刻一刻と無情に時間だけが過ぎ去って
いこうとしていた時だった。

「お姉ちゃん、行つてあげて！」

「章太郎君…….だけど」

「おれは大丈夫だから、良いこと思いついたんだ」

「良いこと？」

「うん！ だから銀姫のお姉ちゃんはビヤクアのお姉ちゃんのところに行つてあげて！

ライダーは助け合いだよ！」

勇気を振り絞つたのは銀姫だけではなかった。

少年の決意が彼女の背中を押す。

※

「ぐああつ!!」

『ふふつ、高いところから急に突き飛ばされる気分はどうかしら?』

一方のビヤクアは触手に捕らえられたまま地上に叩きつけられて苦しげに体をよが
らせた。不意打ちをしてきた存在の正体を察して痛みを堪えながら立ち上がったこ

ろを狙ったかのように全身に絡みつく触手の縛りが強さを増し、ねっとりとした嗤いが響いた。

「深手は負わせたつもりでしたが予想外に元気そうですね。不覚です」

『丁度いいダムド捨て駒が沢山いるからねえ。ちよつとクツションになつてもらつたわ。あの機械仕掛けの駄馬はスクラップにする前に逃げられてしまったけれどね』

軽いダメージを受けただけでまだまだ余力をみせているバケミツキの真相を聞かされてビヤクアは内心で下衆な真似をと悪態をついた。同時に予想外のハプニングに抜け目なく一目散に逃亡した愛機の自由奔放さには溜息が出る。無事なのは幸いだがせめて、なにかしらの報告はして欲しかったと。

「ぐあああ！ 退魔七つ道具が……がっ、ああああ!？」

触手に締めつけられて軋む全身に鞭打つて反撃を試みたビヤクアを嘲笑うようにバケミツキの雷撃が容赦なく牙を剥く。

『させないわよ？ 貴女もあの子に劣らず美味しそうだから残念だけど、御伽装士はしっかりと殺さなくっちゃね？ さあ、存分に苦しんで滑稽に死に絶えなさい』

「いぎ……があああああ!？」

耽美な捕食者の笑みを浮かべてバケミツキは左腕のスタンガンの紫電を右腕の触手に伝導させてビヤクアへと念入りに流し込んでいく。

ガクガクと両脚を痙攣させながら、崩れ落ちそうなところを寸前で踏ん張るが絡みついた触手から直に絶え間なく体を蝕む電流に壊れた玩具のように震えた悲鳴を上げ続ける。

『無様ね！ いいわよ、私がちやんと見ていてあげるから人間としての尊厳も誇りも全部垂れ流して無様に死んでしまいなさい』

完全な勝ちを確信してバケミツキは哄笑を上げた。

自分とビヤクアの周囲には城壁を築くようにダムド達を配置させて、例え銀姫が加勢に來ても容易には辿りつけないようにしてある。

あの良質な愛玩動物の素質がありそうな少女にビヤクアの死を見せつけてから鬨るも良し、二人仲良く屠ってしまったもそれは一興だとバケミツキは溢れる嗜虐心を昂らせて雷撃の出力を増そうとしていた。

だがしかし、バケミツキが自らの完全勝利のために周囲を囲ませたひしめき合うダムの群れこそが彼女たちの命運を分けた。

「そんなこと——」

『+6c.』

「やせなこー」

細剣の銀閃がバケミツキの触手を断ち切ると返す刀で振り抜かれた二太刀目が透き

通った顔を逆袈裟に切り裂いた。

『ギャアアアアアッ!』

痲癩を起したようなバケミツキの悲鳴が夜闇に響く。

攻めに前のめりになるあまり、あまりにも無防備だった顔面に食らった斬撃はただの痛みに留まらない。バケミツキのプライドや余裕を徹底的にスタスタにしたのだ。

「間に合った……大丈夫!」

「ハア……ハア……お陰様です」

『キ、サマ……一体何をしたの? その恰好にどんな仕掛けがあるというのよ!』

辛うじて一本だけ残った触手で顔の傷を抑えながらバケミツキは声を荒げた。

何故?

どうして銀姫がこんなところにいる?

気配を消す術があった?

いや、そうじゃない。認めたくないが触手を斬られる瞬間より前から何か近付いてくる気配をバケミツキは感じていた。

姿を消したりしていたわけでもない。

何よりも不可解なのはこれだけいるダムド達が何故、影も形もある銀姫に何もせず素通りにさせたのか?

バケミツキは肩甲の檻樓を足元まで伸ばして、まるで幽霊騎士のような出で立ちになつている銀姫に憎悪の眼差しを叩きつけた。

「別に……ただダムド相手のかくれんぼなら得意つてだけよ」

『ふざけたことを言つて！ クウウウウ!!』

はぐらかすような銀姫の言葉にバケミツキは怒りで全身を震わせた。

しかし、この手傷はバケミツキ自身が招いた不覚と言つた方が正しかった。

銀姫はその身に纏つた檻樓を伸ばすことで生者の気配を遮断してダムドの知覚から逃れることができる。だが、それはあくまでダムドにのみ有効な気配遮断であつて姿を透明化させているような万物に対して有効な隠密能力を發揮しているわけではない。

実際に銀姫が奇襲に成功したのも自分を認識しない大量のダムドたちを隠れ蓑に忍び足でバケミツキのところまで近付いただけの初歩的なトリックだった。

全てはダムドのことを使い勝手のいい下僕風情と見下してその性質を理解しようとしなかつたバケミツキの驕りが招いた結果であつた。

「私は負けない」

『……ツ!?!』

「あなたには負けられない!」

ビャクアを庇うように細剣を八双に構えて気を吐く銀姫に気圧されたバケミツキは

言葉にならない鬱屈とした呻きを上げながら後方へと下がった。

「銀姫と言ったわね……覚えておきなさい。この傷の恨みは貴女の命で必ず晴らしてあげるから」

そう言い残してバケミツキはこれ以上の戦闘は不利と悟ったのか恨めしそうに撤退していった。頭目を失ったダムドたちもまた蜘蛛の子を散らすように瞬く間に暗闇の奥へと霧散していく。銀姫とビャクアはどうか異世界での緒戦を切り抜けることができたのだ。

「……これ、油断させてまた襲ってくるのかないよね？」

「気配は完全になくなったみたいですし、本当に撤退したんだと思います」

「ふうー。やっと、終わったあ」

敵の脅威が完全になくなったことを確かめ合ってから、変身を解除した朔月は堰を切ったように押し寄せる大きな疲労感と安堵感を感じながらぐいーっと背伸びをして一息ついた。

「危ないところを助けていただきありがとうございます」

「気にしないでよ。それに先に私たちのことを助けてくれたのは……って、わっ!!」

ろくに身構える時間も与えられずに強いられた化神やダムドとの戦闘で昂っている鼓動を落ち着かせていると後ろからビャクアが声を掛けてきた。

まだどんな人が変身しているのか分からないが言葉遣いから怖い人ではないだろうと予想して何の気なしに振り向いた朔月は思わず恐怖で飛び上がった。

「ど、どうしました!?! ハッ……もしや、やっぱり化神の伏兵が!」

「そうじゃないから! 違うの! あ、その……何でもないから。ご、ごめんね」

慌てて白いお面のようなものを手に持った少女を宥めながら、朔月はあなたが怖くてビクビクしましたという言葉を飲み込んでその場の空気をなんとか元に戻した。

朔月の反応も仕方のない事ではあった。

ビュクアの変身を解いた沙夜の容姿は女性にしては長身で濡れ羽色の髪が目元まで伸びて表情が窺えず、着ている物も飾り気のない黒のセーラー服だ。

ハッキリ言つて、夜の廃病院に沙夜はホラー的に似合い過ぎていた。

そんな彼女が音もなく、自分のすぐ後ろに立っていたら朔月じゃなくても悲鳴の一つも上げてしまうというものだ。

「そ、それでは改めて……望月沙夜です。よろしくお願いします」

「私は更科朔月。つて、もう知ってるんだっけ?」

「はい。失礼かと思いましたが預かった通学鞆の中にあつた学生証を見させてもらったので……あ、鞆は別のところに隠してあるので急いで取ってきますね」

「そんなの気にしなくていいよ。望月さんがいなくなつたらお金なくて公園で野宿かも

だったしね」

ビヤクアではない彼女の本当の名前を聞いたことで朔月はより色濃く非常識な戦いを切り抜けて日常に戻ってきたような心地で表情を綻ばせた。

「あ……私もできたら下の名前で呼んでいただければ。その、学年も同じのようすし」「そうだったの！ 大人っぽく見えるからてつきり三年の先輩かと思ったよ」

「クス。私の身近には同じ年でそれも同性の御伽装士……いえ、ライダーはいなかったのなんだか嬉しく思います」

最初はどこかぎこちなく、遠慮し合うように言葉を掛け合っていた二人だったが些細なものでも共通点を見つけると次第に態度も柔らかく、滑らかになっていった。

「いきなり違う世界になんて飛ばされて、どうすればいいのかずつと悩んでたけどあなたに会えたおかげでどうにかなる気がするよ」

そう照れ臭そうにはにかむと朔月はそつと右手を差し出して握手を求めた。

「これからよろしくね沙夜」

「……はい。こちらこそ、不束者ですがよろしく願います朔月さん」

沙夜は思いもよらなかつたと若干驚いた後に嬉しそうに自分の手を朔月の手に重ねた。

「沙夜あちよつと真面目すぎるよ〜そこは気軽にタメ口で言ってほしかったな〜」

「え!? すみません、あまりこういうことに慣れていなくてですね……っ!」

「あはは。沙夜って見た目とは予想違いっていか面白い子だね。じゃあ、ほらもう一回」

「は、はい! よ、よろしくです朔月」

「うん、よくできました」

緊張で顔を赤くする沙夜をみて、朔月は一時しがらみを忘れて無邪気な顔で笑う。

こうして異世界の夜の下で仮面ライダーの宿命を背負う少女たちは出会った。

歩んだ人生も、辿った戦いの軌跡もまるで違う二人の少女。

朔月と沙夜の異世界での物語は本格的に動き出す。

それから二人は病院の天井裏に隠れて朔月を送り出した章太郎を迎えに行つて、公園で帰りを待っている権兵衛の許へ向かうことになるのだが、その道中で仮面ライダー愛を爆発させた章太郎から質問攻めに遭つて戦いとは違う意味でへとへとになるのはまた別のお話だ。

■ 交流

その日、喫茶 Hameln は営業時間がとくに過ぎた夜闇に包まれた時間帯にまだ灯りがついていていた。異世界からやってきた新しい客人たちをもてなしていたからである。

「ん〜♪ 喫茶店のカレーライスってなんていうか、こう……最高だよ〜」
「コンソメスープもあつたかくてホツとします」

年季の入った四人掛けのテーブル席で朔月と沙夜は章太郎も交えて助けてもらったお礼にと店主である権兵衛に振舞われた夕食に舌鼓を打っていた。

こちらの世界に飛ばされてからずっと走って跳んで戦っただしかつた朔月と沙夜は口いっぱいカレーライスを頬張りながら多幸感で顔をふやけさせていた。

「ホントにおいしいですマスターさん！ いままで食べたカレーライスで一番かもです！」

「そうでしょ！ おじさんの作るカレーは最強なんだ！」

「うん！ 最強においしいよ！ 私このカレーライスなら毎日でも飽きないよ！」

「こんな喫茶店のただのカレーでそんなに喜んでもらえるなら光栄だ。こつちこそ、あの怪しい連中から章太郎を助けてもらったんだ。遠慮せずにたくさん食べてくれ」

「いえ、やるべきことやっただけですから。ご主人、改めてごちそうになります」

スプーンを持つ手に力を込めながら笑顔を弾けさせる朔月にはカウンター席の裏側で明日の仕込みをしていた権兵衛は穏やかに口元を緩めていた。

あつという間に権兵衛や章太郎とも打ち解ける朔月とは対照的にやや気後れしている沙夜もぎこちなさそうにお礼を述べ、仮面ライダーである自分たちにあれこれと目を輝かせて質問を投げかけてくる章太郎に答えられる範囲で返事をしていった。

「けど、やっぱり実感が湧かないなあ。自分がその、別の世界に飛ばされたって」

「私は以前自分の世界に他の世界の仮面ライダーが迷い込んできたことがあったので少しは耐性がありましたけど、やっぱりいざ玩具や映像を見せられるとやはり戸惑いが生まれてしまいますね」

自分たちが暮らす世界とはまた別の世界が存在する。

それだけでも大きな衝撃を受けるであろうことだがいま自分たちがいるこの世界では仮面ライダーは古くから続く日本の大人気TV番組に登場する架空のヒーローであると章太郎少年は二人に教えてくれた。

更には過去にこの世界は正真正銘の悪の怪人たちに狙われ、その度に次元の壁を越え

て別の世界の仮面ライダーたちが助けにきてくれたともいう。

「それにしても別の世界の仮面ライダーか……私の世界のライダーはみんな同世代の女子高生だから、どんな人たちがいるんだろう?」

「私の世界は章太郎君が教えてくれた響鬼のように日本各地に老若男女問わずいるのですがエリア別に活動しているので面識が無いんですよ。三つ子さんが一つの怨面、ああ……変身アイテムをシェアして活動している人たちもいるらしいと聞いたことはありますけど」

「なんかそっちもすごそうだね。うん……やつぱり途中で章太郎が見せてくれた動画の……1号さんみたいになんていうか濃い男の人が多かつたり?」

別の世界の仮面ライダーたちの人物像についてあれこれと想像の翼を広げる二人。

朔月はよほどインパクトが強かったのか道中で章太郎に見せてもらった動画に映っていた益荒男・百戦錬磨といった熱い、熱すぎる言葉を擬人化したような風格を備えた始まりの男を思い返し、そのあまりの圧の強さに苦笑していた。

「おれが会ったのは隣兄ちゃんとムゲン兄ちゃん、それに恵理也兄ちゃん! みんなカッコいい高校生の兄ちゃんたちだった! でも、今日は朔月姉ちゃんたち女ライダーなんてレアな仮面ライダーにも会えて最高だよ!」

「……ム?」

「あはは。そうか、やっぱり女子でライダーは珍しいんだ。変身した姿はそんなに可愛くもカッコ良くもない見た目だからなんかごめんね」

指折り数えて、これまででこの喫茶Hamelnに訪れたことのある仮面ライダーである少年たちの名を上げていく章太郎。その中に聞き覚えのある名前が混じっていたことに思わず思考がフリーズしてしまった沙夜。

対面の少女がそんな状態になっているとは露知らず、朔月は七人ミサキの中でもホラーテイストに寄った銀姫の見た目に複雑な気持ちを抱き、無意識に自嘲気味の言葉を口走ってしまう。

「そんなことないよ！ おれのこと守って戦ってくれてた朔月姉ちゃんの銀姫すっごくカッコ良かったもん!! スカルマンみたいな仮面やボロボロのマントも渋くて良いと思う」

「そっか。ありがとう」

思わず漏れた自嘲の原因は見た目だけではなかったのだがそれを真っ向から退けて、目を輝かせながら仮面ライダー愛の限りに銀姫の素晴らしさを熱弁する少年の姿に朔月は僅かに息を呑んでから照れ臭そうにはにかんだ。

「ところで朔月姉ちゃんが戦ってるあのダムドっての戦闘員みたいにたくさんいたけど、銀姫の世界の仮面ライダーたちはどんな怪人たちと戦って世界を守っていたの？」

「え……」

しかし、仮面ライダーが大好きな故にその無垢な好奇心から出た質問に朔月は不意に階段から突き落とされたような悪寒を味わった。

そう、仮面ライダーとは人類と自由と平和のために戦う戦士。それが基本的な設定だ。

けれど彼女たちは違う。更科朔月は違う。

彼女たちノーアンサーによって力を与えられた仮面ライダーは世界のために戦わない。人類のために戦わない。

そう願う者もいるかもしれないがその願望が叶う戦場を与えられはしない。

「その、なんていうか……」

どんな願いも叶えられる。

そんな夢のような特権を得るための殺戮の祭典。

それがいまのところ彼女の物語のハイライト。

たった一席を手に入れるためにぶつかり合うのは高潔さとは無縁な少女たちの強い強い我欲たち。

「まだ分からないこともたくさんあつて上手く言えないけど……平和のために戦ってるよ」

仮面^本ライダー^当の銀^こ姫^とを打ち明けることは結局できずに朔月はありきたりなことを言つて誤魔化した。自分を見て星のように目を輝かせる純粋な年下の少年に幻滅されるのが怖くて彼女は小さな嘘をついた。

道すがら龍騎や555といったシンプルに正義のヒーローとは言い難い仮面ライダーもあるとは聞いていた。

だけど、そんな彼らもどんな理由や経緯があつても人々を守るために戦う場と怪人がいた。

しかし、自分にはそれがない。

確かにダムドは現れる。けれどそれは毎夜執り行われる戦いの舞台である異空間で話だ。

ダムドは別に人類の天敵ではない。無辜の民の命を奪うことも、平和を脅かすこともない。

「ごめんね。私まだ仮面ライダーになつてそんなに経つてないから、あんまり面白いお話を聞かせてあげられなくて」

棘が刺さるような不快な痛みにも似た息苦しさを隠して、朔月はそう言つてどうにか平静を装つた。

仮面が欲しい。

心のどこかでそんなことを思ってしまうぐらいに揺れ動く気持ち在必死に押し殺して、ぎこちなく笑いながら、どうか自分をそんなに見ないでと朔月は章太郎の頭をそれらしく撫でてやりすごした。

「あ、あの！ 二人のお話し中に割り込んでしまうのですがいま章太郎くんが言っていたムゲンというのはどんな人でしたか！」

「わっ!? ビックリした……もしかして、知り合いでもいたの沙夜?」
「知り合いといふかなんというか」

朔月の心情を知る由もない沙夜は図らずも大きな声を上げて場の空気を壊すと血相を変えてこの世界にきたことがあるムゲンについて問い質す。

「ムゲン兄ちゃんねーメガネして、すっごい力持ちだった。変身すると仮面ライダーデュオルっていうのになるんだ！」

「あー……やっぱりでしたか。ではこのお店が無理やり肉体労働をして居候させてもらっていたと話していた喫茶店」

「沙夜姉ちゃんもしかしてムゲン兄ちゃんと友達なの?」

「……いえ、友達というほどでは。でも、一緒に戦いました。そうですね、戦友……仕事仲間といった間柄でしょうか。ムゲン、こちらのお店やお二人にご迷惑おかけしてませんでしたか?」

章太郎からの質問に沙夜はしばし考え込んでからそう答えた。

初めて出会った御伽装士とは異なる仮面の戦士の少年。彼が秘めるその信念を尊重すれば例え淡白な間柄と思われてもこういつた表現をすべきだと思ったのだ。

「そんなことないよ。あの時、おじさんが腰を痛めちゃつてたから代わりにお店の料理作つてくれてたもんね」

「ああ、最初はとんでもないものを作らないかと心配したけど杞憂だったよ」

「けど、初めて出会った時はナイフやノコギリたくさん持つていて燐兄ちゃんと一緒にちよつとビックリしたな。ムゲン兄ちゃんもパトカーのサイレンで慌ててたから王蛇みたいなダークライダーなのかなつて」

「はあ……なにをやっているんですかあのムゲンは」

しかしながら、どこの世界においても図太く生き抜いていた様子の戦友の素行にささやかな気遣いをしたつもりだった沙夜は無用なことをしたなと心底呆れて深い溜息を吐いた。

「ねえ沙夜、ホントにその人大丈夫?」

「えつと、ですね……自動販売機を投げ飛ばしたり、鉄パイプで殴ったら鉄パイプの方がくの字に曲がるような体していましたけど、ちゃんと信頼できる人ですよ」

「ごめん。その男子つてちゃんと人間だった?」

当然な疑問を投げかける朔月とやっぱムゲン兄ちゃんも改造人間か音撃戦士みたいに鍛えまくった人間なんだよと目を輝かせて期待に胸を膨らませている章太郎に一応ただの人間だったと自己申告があつたと説明して、沙夜はつい脱線させてしまった話題を元に戻すことにした。

「ムゲンや他のライダーの人たちのことも興味深いですがそれよりもこうして、仮面ライダーという存在がTV番組として成り立っている物証をいくつも見せられた以上、そんな世界で暗躍している魔人教団や化神たちはとても危険です。何としても止めないと」

「だよね。それでいて街にあるお店や建物も全部自分がいた世界と何も変わらなかったからさ。あ……一カ所あるのか」

「ええ。章太郎くん、この世界の東京にあるあの螺旋の塔はなんでしょう？ 私の世界に……それに朔月の世界にもあんな建物はありませんでした」

押し寄せる信じがたい情報に驚いてばかりはいられない。

自分たちもまた仮面ライダーとしてこの世界に招かれ、あるいは辿りついた以上はなすべき使命があるのだと。

そこで沙夜はまず目に見えて異彩を放っていたこの世界の東京にそびえ立つ螺旋の塔について章太郎に尋ねることにした。

「あのへんてこな塔は一週間ぐらい前から突然あらわれたんだ。同じタイミングで行方不明になった人たちが沢山出てるってニュースもTVで流れているんだけど……一番おかしいのが誰もあの塔のことを気にしようとしなないんだ」

「え、なにそれ……おかしいでしょ？」

「はい。十中八九、怪人たちの企みに関わっていると思います」

章太郎からもたらされた情報に二人は目を丸くした。

更なる情報を得ようと二人が章太郎に質問を続けようとした時だった。

ゴホンと咳払いをしてから権兵衛がジロリと章太郎を一瞥する。

「ところで章太郎、宿題はもうちゃんと終わらせているんだろうな？ あの妙な塔が突っ立てても学校は休みにならないんだぞ？ それにお嬢さんたちもお疲れなんだから、ほどほどにな」

「やっべ。こ、これからちゃんとやるってば！ じゃあ、お姉ちゃんたちごめんね、すぐに終わらせてくるから」

権兵衛の言葉にバツの悪そうな顔をして、章太郎は自分の食器を流し台へ運んでから住居スペースへと行ってしまった。

「すまんね。仮面ライダーが絡むといつもこれだ。自分がイカれた連中に誘拐されかけたことも忘れて夢中になっちまうもんだから困ったもんだ」

「大丈夫ですよ。章太郎がいろいろと話してくれるおかげで私たちも状況が整理できて大助かりです」

「そう言ってもらえるとありがたいが保護者としては心臓がいくつあっても足りないってもんさ」

元気な足音が家屋の奥へと遠のいてから、二人分の食後のコーヒーを淹れながら権兵衛がやれやれと甥っ子への謝罪と不安を零す。

そんな彼に気を遣わせないようにと柔らかな微笑みとセットで朔月からフォローの言葉が出ると権兵衛の表情も明るくなるがまたすぐに眉間に皺が寄る。

「あの、失礼ですが章太郎くんのご家族は……？」

「……あいつがもつと小さい頃に事故でな。いまじゃ俺が唯一の身内さ。例えこの店を売り払うようなことがあっても章太郎が一人前の大人になるまで育て上げる。そうじゃなきゃあいつの両親に顔向けできないからね」

「それは……不躰にすみませんでした」

嘸み締めるように語る権兵衛の表情には普段のこやかな喫茶店のマスターとは一線を画す、男の信念のようなものが滲み出ていた。

章太郎の両親が既にこの世を去ってしまったことを聞き、無神経なことを尋ねてしまった沙夜はすぐさま頭を下げて謝った。向かいの席の朔月もあんなに元気な少年

に両親がいない無情な現実にも何も言わなかったがその表情は暗い。

「気にしなさんな。それになによりも章太郎自身が親のいない身の上に挫けずに元気にやっているんだ。そういう意味じゃ仮面ライダーにや感謝するよ。さあ、こいつはサービスだ」

「は、はあ……ありがとうございます」

店内に漂う沈痛な雰囲気を払うように権兵衛は二人にコーヒーを差し出した。

何の変哲もない材料と水で作られたそれは、しかし熟練の職人技で淹れられたであろう芳醇な香りを放ち、少女二人の暗澹とした心をほぐす。

「おっと、君たちも仮面ライダーだからややこしくなっちゃったな。つまり……親がない境遇なんて気にならないぐらい大好きなものがあるおかげで章太郎はいつも明るくやっていけているんだろうからね。それが仮面ライダーだったんだ」

照れ臭そうに苦笑いを浮かべながら権兵衛はそう語った。

彼の脳裏には先行き不安な自分をよそにTV画面に映る空想のヒーローの活躍に胸躍らせて笑う幼い章太郎の姿があつた。

「情けない話かもしれないが俺がどんなに親の代わり頑張ってもそれだけじゃいみたいにはならなかったさ」

「そんなことは、ないと思います」

中年親父のボヤキに付き合わせて悪かったねと適当にこの話題を打ち切ろうとしていた権兵衛に少し戸惑いながらもハッキリと朔月は声を掛けた。

「えっと、私みたいなお二人の事情をよく知らない人間が言うのは変かもしれないけど……マスターさんが章太郎のことを大切に思ってる気持ちも行動もちゃんと伝わってると思います。だから、その……情けないとか言わなくてもいいっていうか」

「朔月くんだったね？　ありがとう。自分でもよく分かんがそう言ってもらえて勇気がもらえたよ」

思いもしない言葉をかけられて権兵衛は数秒ほどポカンと固まってしまった。

けれど朔月のとりとめはないが真摯さが籠った励ましのような何かを受けとると得心が行ったような穏やかな表情を作っていた。

「あはは……ども」

羨ましいと思っただつもりはない。

年上の男性に丁寧にお礼を言われて、謙遜しながらはにかむ明るい表情の裏側で朔月の心はひどく冷静で乾いていた。

藤堂権兵衛と章太郎の関係を知って、肉親のいない少年の境遇に同情はする。

不器用に、けれどひたむきに親の代わりに愛情だけは大盛りで振舞おうと奮闘する権兵衛の姿に尊敬もするし、報われて欲しいと願う心もある。

けれど、そこまでだ。

その血と縁の垣根を越えた愛情が自分の許にも注がれて欲しいと願う気持ちは微塵も生まれてこない。

身勝手で自分本位な両親によって世間体のために愛情の欠片さえも向けられることなく育てられた代償か血が繋がっていなくても思い遣りに溢れた家族の絆を結ぶ権兵衛と章太郎の姿を見ても彼女の心にはそれ以上の何も湧きあがる感情はなかった。

(神様なんていないだろうけど、もしもいるなら……どうしようもなく残酷な人か、お仕事下手な人なんだろうな)

そして、柄にもなく映画のセリフを真似たような哲学めいたことを一人想う。

だってそうじゃないか。

仮に生命が生まれ落ちる先を割り振る役目を担っている超常の存在がいるのなら、権兵衛と章太郎のような人間が大切な身内を喪っている一方で更科家のような冷え切った家庭が家族という形を無駄に保っているだなんておかしいじゃないかと。

「ところでもう夜もいい時間だが二人は泊まるところのあてはあるのかい？」

「えつと……沙夜はどうする？」

「その、お金も節約しないといけないので私は良い場所を見つけていたので野宿する気でしたんですが」

「ちよつと沙夜、ぶっちゃけすぎ!？」

「あ……」

意味のない空虚なことを考えていると不意にそんなことを尋ねられて朔月はしばらく考えてから沙夜と顔を見合わせた。すると彼女の方は急に話を振られて慌てたのか、あるいは日夜忙しく活動する御守衆の癖が出てしまったのか馬鹿正直にそんなことを口漏らしてしまう。

「……」。若いお嬢さん方がそんなことを気安くそんなことをするもんじゃない。ふむ……燐君たちの同業者みたいだし、もしも嫌じゃなかったらウチの空き部屋を使うといい」

お説教か警察を呼ばれて補導されてしまうかとヒヤリとした二人だったが思わぬ方向へと話は転がっていく。朔月と沙夜は幸運にも旅先で重要な宿泊施設をほぼ無償で確保することが出来たのだ。

※

「……おはよう」

気の抜けた大きな吐息が湯気に混じってとけていく。

「男所帯の住居の浴室は思っていた以上に清潔で殺風景だったがそれでも風呂場に変わりはない。

変わりがあるとすればいまお湯がいっぱいに溜まったバスタブに浸かっているのが瑞々しい肢体の持ち主である沙夜だということぐらいだ。

「すごい一日でした」

白い肌をほんのりと朱に染めて、熱めのお湯に肩まで浸かった沙夜は激動の一日を回想した。自分の世界への魔人教団による再びの襲撃に始まり、謎多き敵であるダムドとの戦闘に別世界への移動。そして、デュオルに続いて巡り会った御伽装士とは異なる仮面ライダーとの邂逅。

「ムゲンやカナタさんたちには感謝しないとイケませんね。彼らとの出会いがなかったら今回の状況に頭がパンクしていました」

ほんの少し前に体験したとある大きな戦いとそれに関係した得難い出会い。

あの一件で慣れを覚えていたことが現状彼女の心身を支える大きな助けになっていくことを沙夜は実感していた。

「謎の塔と推定魔人教団による連続した誘拐事件……奴らは何を企てているのでしょうか？ 化神たちまで傘下に入れていられるのも見過ごせませんね」

両手で掬ったお湯をばしやりと顔に掛け、ふやけていた思考を引き締めて沙夜は脳内

で情報を整理していく。

魔人教団の凶行は以前にも目の当たりにしたが前回と今回では派閥が違うのか彼の行動には破壊行為とは別に何らかの目的があるのは明らかだ。そして、恐らくそれは件の螺旋の塔が大きく関わっているのだろう。

彼奴らの企みが動き始める前に先手を打って塔を破壊するのも一手かもしれない。

幸いにもビャクアの七つ道具の一つ、大具足ならばおそらくは――。

「二人で逸つてはダメですよ。折角出会えたんです……彼女と協力して解決しないと」

あれこれと錯綜する思考を一端止めると気持ち切り替える。

「ご好意に甘えてお風呂までいただいているんだから、ゆつくりと疲れを取って英気を養わねばと。」

「……………ふう……………んん〜」

湯船の中で大きく伸びをすると沙夜の豊満な乳房がさざ波を作って浮かぶ。

本人の自覚は薄いのが御伽装士として日々鍛えられた彼女の肉体は目の毒と言っても過言ではない優れたものだ。

だが当の本人はそんな事実など露知らず、気持ち良さそうにお湯の中でぐるりと体を回しつつ、新しい出会いに口元を緩めていた。

「朔月。初めて出来た同世代の女の子のライダー仲間か……くふふ」

不謹慎だとは思うが沙夜は嬉々とした気持ちを押し殺すことが出来なかった。

自分とはまったく違う人柄に、変身した姿。

彼女のことをもっと知りたい。

自分のことを知ってもらいたい。

不思議とそう思えた。

御伽装士になってしまった宿命と御守衆の在り方から一時期は他人と関わりを疎んで誰とも目を合わせずに生きていこうとさえ考えたことがある自分が嘘のように沙夜は朔月に興味津々だった。

「気合入れていきましよう」

他の御守衆の助けは望めない孤立無援の異世界道中。

不安は尽きないものだがそれ以上の出会いを糧に沙夜は密かにやる気を漲らせていた。

※

同じ頃、朔月は権兵衛に用意してもらった Hameln の二階にある空き部屋で所作

なさげにしていた。ほんの少し前まで物置として使われていた二台のベッドが部屋の両端に置かれただけの質素な部屋だ。

(マスターさんの作ってくれたご飯本当においしかったな……初めてかもしれない、あんなに楽しかった夕食)

片方のベッドに所作なさ気に腰を下ろして慌ただしかった一日を振り返っていた朔月はふと沙夜や章太郎たちと一緒に囲んだ夕食のことを思い出した。

大袈裟など思うかもしれないが実の両親から毎日千円札を一枚だけ与えられるだけのネグレクト同然の生活を強いられている朔月にとっては気を許せる相手と囲んだあたたかな食卓というのはとても貴重なものだった。

「……本当のこと言えなかったな」

だからこそ、幻滅されるのが怖くて自分のことをあこがれの存在として見る無垢な少年の質問に答えて上げられなかった自分に嫌気が差す。

無意識にベッドの上で縮こまるように体育座りをして朔月がネガティブなことを悶々と考えていると部屋の扉が開く音が無音の空間に響いた。

「お風呂、お先にいただきましたあ」

全身からほかほかと湯気を立ち上らせて、湯上りの沙夜が戻ってきた。

漆黒のセーラー服から貸してもらったTシャツとジャージに着替えた彼女は長身な

ことも相まつてまるで合宿中のスポーツ少女のようにも見える。

「朔月？」

「あ、うん。おかえり」

もしかしたら物思いに耽っていて何度か呼ばれても気付かなかつたのだろうか。

不思議そうにこちらを見る沙夜に朔月は体育座りを解いて何事もなかつたかのように浴室へと向かおうとする。

「朔月。その、もしも迷惑でないのならちよつとお話しませんか？」

「へ？」

「と、隣……失礼しますね」

そんな彼女を引きとめるように突然、沙夜はそんな風に口火を切るとまるで初めてのデートで緊張する青少年のようなぎこちない動きで朔月の隣に腰掛ける。

「……あの」

「……あの」

ほんの数秒の沈黙。

奇跡的に喋る内容を纏めて声に出す覚悟を決めるまでの時間が見事に被つた二人の言葉が見事に重なった。

「……ごめんなさい。あの、お先にどうぞ」

「いや、いいよ。その先に話しよって言ったのはそっちだし沙夜の方からで」

「で、では……つかぬことを聞いてしまえますが時折、朔月が苦しそうな表情をしているような気がして、その仮面ライダー絡みで悩みや不安があるんじゃないかと」

わたわたとどこか滑稽なやり取りを経て沙夜は前髪の隙間から心配そうな眼差しで朔月のことを見ながら夕食時から見られた彼女の変化について率直に尋ねた。

「今日出会ったばかりの私が気安く聞いていい事柄ではないのかもしれませんがもしも力になれるようなことがあるならと思つて……ごめんなさい。出過ぎた真似でしたよね」

「そんなことないよ！　ありがと……なんて言うか、その、みんなが羨ましくてさ」

薄々隠し事は苦手な性分だと言う自覚はあったがこんなにもあっさり胸の内に抱えていたモヤモヤを見透かされてしまった朔月は観念したようにポツポツと章太郎には言えなかった自分の世界の仮面ライダー在り方を話し始めた。

「私たちの世界の仮面ライダーってね、世界のためとか人類のためとかに戦っているわけじゃないんだ。自分たちの願い事を叶えるためだけに七人のライダーで殺し合っているだけなの」

「それは……章太郎くんが教えてくれた龍騎のようなバトルロワイヤルのものだと思いますか？　ですがあのダムドという怪人たちは……？」

「ダムドのことは私たちもよく分からない。ノーアンサーはライダーバトルが行われる異界に発生する亡者。せいぜいデスゲームの障害物程度のものだとしか」

まるで裁判所の法廷に立たされたような重圧を感じながら、それでも朔月は沙夜に本当のことを打ち明けた。

自分たちの仮面ライダーの殺し合いに人類の自由や平和は一切関わらない。

正義に味方のように人間を襲う怪人を相手に戦ったのも今日が初めてのことだったと。

「そんな凄惨なことを強いられていたんですか、ただおまじないを唱えただけで……拒否権もなく？ ノーアンサー……あの女はやはり」

「だからさ、沙夜やこの世界に来たことがある他のライダーたちみたいにTVのヒーローみたいになんかのために戦えるみんなが羨ましくて」

聞かされた七人ミサキの陰惨で残酷な内容に憤る沙夜の隣で計らずして溜めこんでいたものを吐き出せた朔月はどこかスッキリとした様子で、それでも虚しそうに微笑を浮かべた。

「私の世界では怪人は地震や津波のような災害のようなものなんです」

前髪の隙間から紫水晶のような瞳でそんな様子の朔月をしばらくジッと見つめていた沙夜は不意にそうやって自分の世界のことを話し始めた。

「その上、人間の負の感情……穢れと呼んでいるんですがそれを餌に湧いて出てくるので私たち御守衆は化神の悪さに巻き込まれた人間の記憶を消すようにしています。私も見ず知らずの人から学校の知人とたくさんの人の記憶を消してきました」

「なんか寂しいね」

「はい。だから、不謹慎ですが嬉しかったですよ。章太郎くんが私のことを仮面ライダーだつてとても喜んで憧れてくれたこと」

目元は相変わらず長く伸ばした黒髪で覆われて窺い知れないがゆるやかに上がつている口角から相当に嬉しかったことが見て取れる沙夜に朔月は素直に驚いた。

まるでオカルト系の漫画か映画に出てくるような容姿から沙夜のことをてつきりミステリアスでクールな仕事人のような少女なのかと想像していたからだ。

「ええ、自分で言うのもなんですが食事中も章太郎くんにサインとかプレゼントしてあげればいいのかとか考えていました。筆記体苦手なんです」

「ぷっ!!」

見た目に反してあんまりにも庶民的な発言を連発する沙夜に朔月は堪らず吹き出してしまった。

「あつはは! それは流石にアウトでしょ〜間違いなくお店に飾られちゃうよ?」

「やつぱりですよね? やらなくて良かったです。バレたら上司からのお説教じゃ済み

ませんでしたし」

冗談でもおどけているわけでもなく、本気でそんな俗っぽいことを案じていた沙夜に先程まで曇った気持ちになっていた朔月は大きな声で笑いを零した。

「ごめん。私、実は沙夜のこともつと大人っぽい違う世界に生きている同世代の女の子って思ってたけど、どうも誤解してたみたい」

「私なんてこれっぽっちも特別でも何でもない普通の女子高生ですよ。むしろ、よく野暮つたいと言われます。だから、その……朔月も私たちも一緒なんだと思います」

「え？」

「自分を卑下しないでください。貴女も紛れもなく仮面ライダーです。だって、今日、章太郎くんを守り抜いたのは誰でも無い朔月なんですから」

ほんの少しおぼろげと、けれど迷うことなく隣に座る朔月の手に分かたず重なって沙夜はハッキリと伝えなければならぬ言葉を彼女へと口にした。

「私一人では間に合いませんでした。章太郎くんを……彼と権兵衛さんの日常を朔月が守ったんです。だから、貴女はもう貴女が羨んでいた理想の仮面ライダーになれている……私はそう思います」

「……………」

朔月は息を呑んだ。

最初はどんな気持ちでいればいいのか分からなかった。

けれど、胸の奥から心地の良い熱がこみ上げてくるのは確かに解った。

「ありがとう。それから、改めてよろしくね沙夜」

「……はい」

「それじゃ、私もお風呂行ってくるよ」

「いつてらっしゃい。明日から忙しくなると思いますのでゆつくり疲れを癒してきて下

さい」

「うんー」

そう言っ、朔月は軽やかな足取りで浴室へと向かっていった。

まだお互いに知らないことも分からないこともたくさんある。

しかし、朔月と沙夜はおっかなびっくりでも着実に友情を深めていった。

その日の夜。

ベッドの中で朔月は密かに闘志を燃やしていた。

いつもならば殺戮の宴の場に呼び出されることのない静かなこの世界の夜の中で。

この世界でならば、この世界にいる間だけでも自分は最初に願い、思い描いていた理想としての仮面ライダーでいられると。

自分とは別の仮面ライダーと殺し合うこともしなくてよいこの世界で一時の淡い時

間であつたとしてもなりたい自分になるんだと朔月は決意して、久しぶりの心地の良い眠りへと落ちていった。

※

真夜中の公園のベンチに一人の女性が力なく座つてコンビニで買った菓子パンでお粗末な夕食を済ませていた。

まだ二十代前半といううら若き年頃だというのにその女性は疲れ果てていた。

理不尽ばかりの会社勤め、息苦しい人間関係、鬱屈としたストレスから逃れるために気が付けば男遊びや散財で底が尽きかけている金銭。

何もかもが辛くて嫌だった。

まるで生きているのに覚めることのない悪夢を見ている様な毎日。

そんな不幸を背負つた人間の傍にこそ魔人は甘美な罠を携えて現れる。

『のぞみ。のぞみ……おいで。お仕事が終わつたんだらう？ おつかれさま』

突然耳元に飛び込んできた懐かしい声に女性が覇気なく顔を上げると彼女の瞳には一瞬で涙が溢れた。

「おばあ……ちゃん？」

『がんばったんだねえ。えらいねえ』

「あ、ああ……う、あ……ああ。おばあちゃん……そうだよ、わたしががんばってるよね」

女性の目の前には四年前に亡くなった彼女の祖母がいた。

ちょうど彼女が社会人になる目前に亡くなった大好きな、大好きな祖母だった。

家族の中で一番自分に優しくしてくれた一番の理解者だった。

『辛いことは忘れてゆつくりとおやすみ。だいじょうぶ、ずつとおばあちゃんがついてくるよ』

「うん！ うん！ ありがとう、おばあちゃん……うう、夢でもうれしいよおばあちゃん」

『夢なもんかい。ああ……夢じゃないよ』

泣きじゃくり、女は深い深い眠りに落ちていく。

自分が抱きついた存在がおぞましい異形だとはついぞ気付くことなく。

『これからアナタは一生目覚めることはないのですから、言い換えればそれはもう夢じゃないでしょう』

どこまでも人間を嘲弄したような声色でナイトメアメタローは囁くと捕らえた女性をダムドに預けて螺旋の塔へと運ばせる。

『さて、今宵はお邪魔虫ももう出てこないでしょうしサクサクとノロマをこなしていきますか』

女性が見ていたものは全て、全てナイトメアメタローが見せていた甘い毒のような幻だった。バケミツキと仮面ライダーとの交戦と劣勢による撤退。味方陣営の不利さえ活用してナイトメアメタローはある計画の成就のために暗躍を続ける。

■ 遊行

怪物たちが跋扈していた夜が嘘のように静かで平穏な朝が来た。

ゆつくりと陽が昇り始めた時刻。

街並みを包む色彩が暗闇から淡く澄んだ青に移り変わる頃に朔月は目を覚ました。

「やば……すごく寝れた」

むくりとベッドから上半身を起こしながら、朔月は顔にかかった髪を掻きあげ眩いた。

日頃から早起きして活動することが習慣となっている彼女にとっては今日の起床時間は普段とさして差はない。

彼女が独白するすごくとは睡眠量ではなく質の面だ。

良い夕食に、良い出会いの恩恵かとても熟睡できたという実感がある。

「あれ？ 沙夜？」

視線の先にあるもう一台のベッドは既にもぬけの殻だった。

布団と寝巻として貸してもらった服が丁寧に畳まれている。

「私も起きちゃおう」

今日の予定について特に話し合ったわけではないが自分だけ二度寝に興じるというのも気がひけたので朔月も自分の制服に袖を通して部屋を出た。

まだ早朝ということもあり家主たちの眠りを妨げないように物音に気を付けながら朔月が一階の店内スペースにまで足を伸ばすと探していた相手は店の外にいた。

その手にはトランプのケース程の大きさの木箱が握られているようだ。

「……………」

店の軒下にいる沙夜は念入りに周囲を窺い、新聞配達など近くに誰もいないことを確認すると手に持っていた木箱の蓋を外した。中身はどうやら不思議な文字や模様が綴られた御札のようだった。

「ん…………朔月？」

「おはよー沙夜」

木箱の中の御札で何かを始めようとしていた寸前で沙夜は気配を感じ取ったのかピタリと制止すると窓越しに店内を覗き込み朔月の姿を見つけた。

「おはようございます。ごめんなさい、起こしてしまいましたか？」

「ううん。私も普段から朝早い方だからさ」

申し訳なさそうにしている沙夜にヒラヒラと手を振りながら答えると朔月も店の外へと出る。朝露煙るひんやりとした空気が微かに残っていた眠気をすつきりと取り除

くようだ。

「それより何していたの？」

「これですか？ 偵察用の式神です。人目が多くなる前に飛ばしておきたかったのです」

「式神？ なんか友達から借りた漫画雑誌でそんな単語を見たことあるような……どんなの？」

「では僭越ながらご覧じろ。あ、大きな声は控えてくださいね」

興味津々で首を傾げる朔月に沙夜は人差し指を口元に立てて小さく笑うと真剣な面持ちに切り替えて、右手に握る木箱の御札にそつと左の指を添える。

「発」

凜とした一声を合図に御札に書かれた文字模様が黒から朱へと変わった。

「散」

再び沙夜が短く唱えると木箱に収められた御札がまるで生命を吹き込まれたように次々に空へと舞い上がっていくではないか。

無数の御札は自動で折り鶴に変わりながらあつという間に空の彼方へと飛び立っていったのだ。

「わあく飛んでいっちゃったよ!？」

「範囲は限られますがこれでこのお店を起点に周囲でおかしなことが起きてもすぐに知

ることが出来ます」

「すごいもの見ちゃったよ。沙夜のいる世界ってあんなのあるの？」

「フフ。御守衆の技術職人組謹製です」

化神の搜索や追跡の必需品である仕事道具に目を輝かせる朔月に沙夜は自分が作つたわけではないがほのかに得意げな笑みを浮かべてその機能を説明した。

化神に加えてその背後に魔人教団が暗躍している以上、いつもとは勝手は違うが式神を通じて怪人の出現などへの対応が少なからず早まることだろう。

それから二人は泊めてもらったお礼を兼ねて店の掃除を行い、権兵衛たちが起床してからは朝食の支度を手伝って賑やかな朝を迎えた。

「うう……ホントは学校休んでお姉ちゃんたちライダーの使命の手伝いしたいのになあ」

「こらっ、なに言ってるのさこの子は。ちゃんと授業受けてこないと章太郎にもう私たちの話聞かせてあげないよ？」

「分かったよ。いつてきまーす！」

「よろしい！　いつてらっしやい。気をつけてね」

「あ、そうだ！　朔月姉ちゃん、ヴァンダル・リーグって知ってる？」

四人で朝食を済ませてから沙夜は権兵衛に付き添って厨房で仕込みの手伝いを行っ

ていた。諸事情により、調理関係の手伝いは難しいと判断が下されてしまった朔月は学生の本分を全うして小学校へ向かう章太郎を見送る係だ。

「聞いたことないよ？ 何なのソレ？」

「そっか、朔月姉ちゃんも知らないか。前に隣兄ちゃんと恵理也兄ちゃんがそんな組織の怪人とも戦ったことがあるんだ」

「魔人教団の他にもそんなのが……教えてくれてありがとう。沙夜と一緒にその人たちのことも調べられたら調べてみるよ」

「うん！ がんばってね！」

こうして朔月は章太郎から気になる話を聞きつつ、まだ未練そうにしている彼を笑顔で小学校へと送り出した。

※

起床が早かったこともあり、その後の喫茶 Hameln の午前はゆるやかだった。

その間、二人はお店の雑用をしつつここ数日分の新聞などから昨日章太郎が教えてくれた連続失踪事件について調べてみたものの行方不明者の名前や人数が分かるぐらいが精々で有益な情報は得られなかった。

「ねえ、沙夜。ちよつと考えたんだけど怪人退治とかで忙しくなる前に着替えとか買いにいかない？」

「着替えですか？ 確かに状況によつては何日かこちらに滞在することになるとは思いますが何もそこまで……幸い二人とも学校の制服ですからどこを出歩いてても悪目立ちしませんし」

何から何まで藤堂家に頼るのも不味いと切り出された朔月の提案だったが沙夜の方はイマイチ反応は鈍かった。これは沙夜が図々しいというわけではなく、御伽装士として化神を追つて時に人里離れた寒村や僻地に何日も籠ることもある職業病の一種が発動していたからである。

「いや、だからさ……何日も泊まるかもしれないから、替えがないとヤバイでしょ？」
「はあ……？」

「下着とかは流石に何日も使い続けは出来ないでしょ？ 身につけないって選択肢はノーだからね」

気乗りしない様子、もとい意図を理解出来ていないと言った感じの沙夜に朔月は内心驚くばかりだった。御伽装士なるものはそんなにストイックな集団なのかと愕然としたがふと望月沙夜という女の子の人柄も少しずつ分かってきていたこともあり、念押しとばかりに小声で再度尋ねてみた

「あ」

間の抜けた声とはこういう声だろう。

そして、自分のものぐさと慎みの欠如を朔月の指摘で自覚した沙夜はとても恥ずかしそうに赤面して声にならない悲鳴を絞り出していた。

「うん。大丈夫、昨日ちゃんとお風呂入ったからいまはまだ清潔だよ、私たち。だったら次のステップへと行こうじゃないか？ いいね沙夜？」

「は、はい。ご指導ご鞭撻よろしくお願いします」

「ちよつとそれは重いかなー」

自分の両肩をガツシリと掴み相変わらず恥で顔を真っ赤にしながら項垂れる沙夜に苦笑しながら、朔月はよし！と気合を入れると権兵衛に事情を伝えて東京の街へと繰り出した。

※

街に出た二人はまず化粧品店や、ランジェリーショップを巡って最低限必要な物を買集めた。その際、熱心にスキンケアを勧める朔月にたじろぐ沙夜がいたり、何気なく沙夜が選んだブラジャーのカップ数に度肝を抜かれる朔月がいたりしたが、そこは割愛する。

そして朔月に手を引かれる形で次に訪れたのは、大型のアパレルショップだ。

各フロアごとに様々なジャンルの服が取り揃えられたその店は、数階建てのビル丸ごとを占拠するほどに大きかった。客の入りも上々のようで、女子たちの楽しげな声が響いてくる。

普段自分が近づくことさえしない空気に当てられ、沙夜は後ずさりした。

「こ、こんなところに行くんですか、朔月。もつと小さいお店とかでもないのですか？ 路地裏の呉服店とかそういうところで！」

「呉服店で、いつの時代の人？ もう、折角なんだから色々試してみなきゃ。沙夜に任せると黒づくめとかにしちやいそうなんだもん」

「そ、そんなことは……あるかもしれませんが」

ファッションにまるで興味が無いという訳ではない。が、どうしても機能性を重視してしまう沙夜はこういったキラキラ女子たちが集うような場所に寄ることが極端に少なかった。あるとしてもショップピングモールの服飾専門店くらいだ。

なのでこういったところには気後れが勝つ。しかし朔月にガツチリと手を掴まれている都合上、逃げることはできない。鍛えている沙夜ならばその気になれば振り払うことは可能なのだが、新しくできた仲間にならばそんなことをする訳もない。

それに少し、楽しみではあった。

服を買うという友達同士でならよくありそうなお出掛けですら、沙夜にとつては遠い世界の出来事であったから。なので純粹な憧れと期待に胸を膨らませているというところも、無くは無かった。

キラキラしい雰囲気に当てられて若干足は震えていたが。

「レッツゴー！」

「あああああ」

引き摺られるようにして入店する。即座に色とりどりの衣服とそれを着こなしたマネキンが出迎え、沙夜はそれだけで帰りたくなつた。

「うーん、流石に大きいお店だと目移りしちゃうな。沙夜はどれがいい？」

「ん、ん、んこのコートで！」

「いやそれ店の一番入り口にあった奴だし。それに男物だし」

早く帰ろうと沙夜は近くにあつた物を適当に手に取る。

それを見てやはり沙夜のセンスに任せてはおけないと、朔月は奮起した。

「よし、やっぱり私がコーディネートしてあげる！ さっきご鞭撻とか言つてたし、拒否権はないからね！」

「ううう、やはりそうなりますか。お、お手柔らかに……」

「オーキドーキー！ さあ行くぞー！」

そして朔月にとっては愉快な、そして沙夜にとっては地獄のファッションショーが始まった。

試着室を占拠し、朔月は自身と沙夜を着せ替え人形にしていくな。

「さあまずはフリフリ量産型コーデ！ やっぱり可愛く女の子らしくね！」

「ピピピ、ピンクすぎます！ それに、あ、足が……！」

最初に朔月を選んだのは俗に言う量産型コーデという物だった。その名の通り量産されてそうなくらい多くの女子が身につけるガーリーなファッションである。

沙夜が着せられたのはフリルとリボンがたっぷり添えられたピンクのブラウスに白黒チエツクの可愛らしいスカートだった。しかもミニ丈で、太ももの大部分が露出している。足は短めの白ソックスとロリータパンプスで、ヒールを履き慣れない沙夜は足をガクガクといわせていた。髪もリボンでツイントールに縛られ、全体的に幼げな出で立ちとなっている。

その隣の朔月もやはり甘めなコーデ。ただしこちらは沙夜と対になることを意識したのかホワイトとパステルブルーだ。足元も似た感じだが、頭には白いヘッドドレスを乗せていた。

「可愛いー！ ちょーキュート！ 沙夜は身長高いからクール系が似合うかもだけど、振り切ってこつちにしても全然アリだね！」

「いやスカートが短すぎます！　ここまで足を出す必要はありますか!？」

「えー、大手を振って足を出せるのなんて若い間だけなんだし、存分に出していいですよー」

部屋着やトレーニングウェアならまだしも、往来で生足を出すほど沙夜は露出に慣れていなかった。

甘すぎる服装に赤面しっぱなしである沙夜と違い朔月は平然としている。というのも、朔月の趣味ど真ん中であるからだ。現実には古着屋などにお世話になっている為、実際に持っているのは数着だけだが。

「それに、こ、これじゃいざという時動けませんからー」

「えー、沙夜の生足スラツとしていて素敵なのに。でもミニスカじゃそうかもね。仕方ない、次はもつと活動的なのにしよっか」

そう言つて朔月は次のコーデを選び、試着室の中に沙夜を連れ込んでもみくちやにする。

次に二人が身を包んだのは朔月の言つた通りスポーティなファッションだった。

「題して夏真つ盛り！　そうだ海に行こうコーデ！　これなら激しく動いても平気でしよっか」

「ま、また足が出てます！　それに今度はおへそまで!」

動きやすさという免罪符によつて沙夜が着せられたのはオレンジのキャミソール、そしてダメージ加工が施されたジーンズ生地ホットパンツだった。しかしそれらはやたらと布面積が少なく、キャミは胸元だけを覆い、ホットパンツはかなりローライズだ。そのおかげで沙夜の鍛えられ引き締まった腹筋が丸出しとなっている。足元は赤いサングラスで、今度は足を隠す物がソックスすら無かった。

髪をシユシユでポニーテールにされた沙夜は身体を隠すようにして朔月へ抗議する。

「こ、これほとんど水着みたいな物じゃありませんか!!」

「じゃあ水着と思えば恥ずかしく無いでしょ?」

「た、確かに……いやどんな理屈ですか! それに私は水着であってもこんなおへそ出る奴無理ですから!」

「じゃあこつちがよかつた?」

一方おさげに麦わら帽子を被つた朔月は同じくホットパンツだが、上は白いチューブトップにシースルーのTシャツを重ねていた。半透明な生地に覆われてはいるが肌面積は更に広く、どちらの方が露出が多いかは意見が分かれるところだ。

「う、ぐぐ、確かにそつちはそつちで……というかそんなに暑くも無いのにこんな服装してたら明らかに浮くじゃ無いですか! 目立つのはノーです!」

「ちつ、バレたか」

「バレたかじゃないんですよ！ 次こそは露出度の低い物にしてください！」
「しようがないなあ」

澁々朔月は従つて別の服を用意する。

次に試着室のカーテンを開けた時、二人はポーズを決めていた。

「今宵も昏き夜が訪れる。それは遍く罪が蔓延る闇の刻……」

「さ、されど邪悪は榮えない。それを裁く使徒が穢れた地上を浄化せん」

「我が名はダークムーン！」

「我が名はふ、フルムーン！」

「二人に仇為す罪悪は、我ら夜の化身が成敗する！」

どどーんと効果音が鳴りそうな口上付き決めポーズを、一人はノリノリで、もう一人は顔を赤くしながら披露していた。

そんな二人が着ていたのはいわゆるゴスロリだった。黒を基調としたフィットシユテールのワンピースに、十字架を施したりボン付きカチューシャ。やはり黒のパンプスに網タイツ。胸元を強調するハーネスベルト他、シルバーチェーンに指抜きグローブと、まさしく厨二病女子ど真ん中の地雷コーデだった。それぞれ差し色がダークグリーンかワインレッドかという差はあるが。

新月の使徒ダークムーンを名乗った朔月は右目に眼帯をつけて特に乗り気だった。

「ふっ……決まった」

「こ、これはこれで別の羞恥が……!」

満月の使徒フルムーンを名乗った沙夜の方は服の赤に負けないくらい赤面していたりしたが。

「どうしたの、沙夜。もっと闇の使者っぽい雰囲気出さなきゃ」

「いや無理ですよ。なんで朔月はそこまでノリノリにできるんですか」

「ククク、我は闇の者……変身後の姿的にも……」

「私からすれば陽の者ですけどね、充分に」

オリジナルで考えた名乗り口上を述べた後も姿見の前で色々なポーズを取って遊ぶ朔月を、沙夜はどんより疲れた表情で見つめた。

中でも朔月は気に入ったアイテムがあるようだ。

「この眼帯かっこよくない!? ガチで欲しいかも! いいなあ、将来付けようかなあ。自分好みにオーダーメイドしたりして」

「そんな機会がありますかね……?」

言いつつ沙夜は、ワンピースの裾を掴み上げた。

「というか、これ……高くないですか? 生地とかドレスみたいにしっかりしてますし、アクセサリーに至っては金属ですし……」

「あ、これは遊んでいるだけでハナから買う気はないよ」

「じゃあ今の時間なんだったんですか!？」

ガーンとシヨックを受けあんぐりと口を開く沙夜。そんな彼女をスマホのシャッターに収めながら、朔月は言った。

「楽しかったでしょ？」

「え？」

「こーやって着せ替えして、遊んで、はしゃぐのが。誰かと一緒ならなんだって、それこそ時間の無駄だって楽しい。馬鹿みたいに笑って後からアレは無かったなーって後悔して、それでも顔がニヤけちゃう。私は、そんな時間が人生で一番好き」

そう言って朔月は沙夜に向かってはにかんだ。

朔月は知っている。沙夜が寂しい青春を送ってきたことを。昨日の会話で僅かに知っただけだが、それでも自分では耐えきれないような日々を過ごしてきたことを。だからこうして、自分なりの楽しい時間を教えてみようと思いついた。それが昨日、沙夜に送ってもらった言葉への返礼になると信じて。

「沙夜は、楽しくなかった？」

「そ、それは……」

沙夜にとって同性にここまで振り回されるのは初めての経験。慣れないことばかり

で目を白黒させて、疲れてしまいそうな時間だった。

だが、どう思ったかといえば――

「……楽しい、です」

――そう素直に言えた。

「こういうの初めてで、怖くもありますけど、でも、やっぱり楽しいです。朔月と一緒に、ええと、はしゃげるのが」

答えて微笑する沙夜。紛れも無い本心だ。修行漬けの青春を送った自分としては目が回るような、でも新鮮な時間。

楽しいか楽しくないかと言われれば、答えは決まっていた。

自分が望んでいた言葉に朔月はホッと笑みを浮かべる。

「えへっ、ならよかった！　じゃあ次は〜」

「ま、まだやるんですか!?!　それはちよつともういいかなくなって思うんですが!!」

「何言ってるの！　着替え倒さなきゃもつたいな――」

まだ暴走しようとする自分を引き留める沙夜に振り返って、朔月はふと思う。

沙夜は長い前髪で目を隠していた。このファッションショーに興じている間もずっとだ。

髪型をいじっている間、恥ずかしそうに顔を覆い隠していたものだから前髪には触れ

ずにいたが、そう言えばまともはまだ素顔を見ていない。

一度そう気付くと、気になってしまう。

「……ねえねえ沙夜」

「は、はい？　なんででしょうか」

「ファツションがいやならさ、もっと簡単に換えられる物を変えていい？」

「へ？」

「……えいつ」

沙夜が呆けた隙を狙って、朔月はさらさらの髪に手を通すと一息に上げてしまった。すると、予想以上に整った顔が目映る。

「わあっ……！」

静かな知性と意志を感じさせる紫水晶のような瞳。スツキリと通った柳眉に白い肌。見えていた顎や唇からも、美人であることは予測していた。だが実際の美貌は、遥かに格上。まさしく大和撫子と言うのに相応しい美少女だった。

「ひゃあっ!？」

突如として己の視界を広げられた沙夜は、パツと離れて前髪を直してしまう。そんな沙夜に朔月は即座に詰め寄った。

「可愛い可愛い可愛い！　えー何それ！　すっごく可愛かった！」

「や、やめてください……そんなことありませんからっ」

「いやいやめっちゃ綺麗だったよ！　なんで隠しちゃうの、絶対もつたいないって！」

沙夜の美貌に朔月はビックリし、それ以上に興奮した様子で力説する。

「人と目を合わせるのが億劫で……それに今更顔を晒す勇気が……」

「化神相手なら一切物怖じしないのに」

「それとこれとは別ですから！」

「えー、でもそんなに綺麗なのに……うーん……あ、そうだ！」

少し悩んだ後閃いたようにぼんつと手を打った朔月は、そのままどこかへ行ってしまう。

「え、ちよつと、朔月!？」

置いて行かれた沙夜だが、試着室に残った制服などを放つてはおけない。仕方なくその場で待ちぼうける。その間他の客にゴスロリ姿を見られているようで落ち着かず、俯いてはモジモジと心細げに指を合わせたかたまりしていた。

やがてたつたか駆け足で戻ってくる朔月。その手には何かを持っていた。

小さなそれを沙夜に向かって差し出す。

「はい、沙夜！」

「え、これは……」

それはヘアピンだった。シンプルなデザインで、色は変身後の姿を彷彿とさせる白。特別な品では無きそうだ。

「ヘアピン、ですか」

「そう。これを、こう!」

朔月は片目上がるよう前髪を掻き分け、それが落ちてこないようヘアピンで留める。露わになった一つだけの紫瞳が、光を浴びて宝石のように煌めいた。

「あ……」

「両方いつぺんが無理ならさ、せめて片っぱだけでも、どうかな? 折角綺麗なんだし、私は見てみたいな」

それでも無理強いほししないと、苦笑する朔月。

沙夜は新鮮な視界に呆然としていたが、やがて困ったように口の端を少しだけ上げて微笑した。

自分一人では到底思いつきもしない発想だ。それを軽々と行ってしまう彼女が、やはり眩しかった。前髪というフィルターを半分失っているから、余計に。

「駄目?」

「……仕方ない、ですね。他ならぬ朔月の頼みですから。……この世界にいる間は、そうしてみましようか」

「やった！」

この提案を受け入れれば、少しは近づけたりするのだろうか。

頷く沙夜に朔月は小さく飛び跳ねて喜んだ。ガッツポーズを決めた後は、再び沙夜の手を取る。

「それはもうお会計済ませてきたから、プレゼントね！　じゃあ今度は何着ようかな」
「え、やっぱりそっちも続けるんですか!？」

「もつちろん！　うーん、今度こそ高身長に似合うモード系かなあ。いやパンキツシユも捨てがたいな。いつそのことコスプレとか……！」

「も、もう堪忍してください……！」

しかしもう反抗するだけの気力もなく、沙夜は朔月に引き摺られていくのだった。

その後も魂の抜けた沙夜を連れたファッションショーは長らく続き朔月による撮影会なども行なわれたが、結局予算的な面から考えてTシャツやワンピースなどと合わせやすい安価な数着のみを買った。そして、朔月がプレゼントしたヘアピンも。

沙夜は宣言通り、店を出た後もそれを外すことはなかった。

※

買い物物を無事に済ませた二人はファストフード店で簡単な昼食を済ませた後で本格的にこの世界で暗躍している魔人教団や化神たちの企みについての調査を開始した。

手掛かりとなりそうな連続して起きている失踪事件について聞き込みを試みたが成果は乏しかった。

警察や探偵が相手ならば街ゆく通行人も真剣に質問に答えてくれるのだろうが傍から見ればただの女子学生な朔月と沙夜の問いかけに親切丁寧に答えてくれる者は少ない。学校の課題で〜という方便を用いられなければ不審がられてあべこべに通報や補導されていたかもしれない。そこで朔月は次の手を考えた。

「えーつと……ここだね。さ、入ろう」

「は、はい」

途切れることなくドアが無数に並んでいる清潔だがどこか無機質な通路をしばらく進んで朔月は足を止めた。その後ろには不安と興味でそわそわした様子の子の沙夜がついていく。

二人が訪れたのは近場にあつたネットカフェだ。

路上での情報収集が難しいのならばインターネットの力を借りようと言う訳だ。

朔月も沙夜ももちろん自分の携帯を持って別の世界から転移してきた影響からかネット機能や通話が使用できないのは現代っ子たちには少々厳しいものだ。

「ペアシート空いていてよかったね！」

「これがネットカフェ……もつとこう薄暗くて息苦しい場所を想像していたのですがすごすぎいですね」

勝手知ったると言った様子で2〜3人用のシートに腰を下ろしてくつろぐ朔月。

複雑な家庭事情もあり、地元のネットカフェで一夜を明かすことも少くない彼女とは対照的に人生初体験の沙夜は露わになった片目を輝かせて舞い上がっていた。

「昔はよく知らないけど、最近のお店はどこも綺麗で居心地いいよ。シャワーもあるし、場所によっては朝ごはん出してくれるところもあるしね」

「もうホテルじゃないですか!? 恐るべしネットカフェ……」

「フフフ……これでまた一つ、沙夜を私色に染めてやったぜ」

芝居掛った口調で悪い笑顔を浮かべながら軽快にキーボードを叩いて調べ物を行っていく朔月。初のネットカフェにカルチャーショックを受けて、コロコロと忙しく表情を変えていた沙夜はしばらくすると寄り添うように朔月と隣に身を寄せて共にディスプレイを眺めた。

「とりあえず、ネットの掲示板やSNSで事件に繋がりそうな単語を検索して調べてみるよ」

「朔月は私の知らないことをたくさん知っていますね。尊敬します」

「ちよつと大袈裟じゃない？ 沙夜だってきつかけがあれば簡単だよ」

片目が晒されたことで喜怒哀楽が更に分かりやすくなった沙夜が向ける誠実な言葉に朔月は苦笑した。自分からしてみたら式神など怪人退治の仕事道具を自在に操る彼女の方が立派なものだろうに考える。

「いいえ、だからこそです。私はそのきつかけすらからも逃げ癖がついていましたから」「え？」

「章太郎くんや権兵衛さんと打ち解けるのもそうです。私が何を話せばよいのかあれこれ苦心して考えている間に朔月は簡単にお二人と仲良くなっていました。ずっと、誰とも目を合わさず、ただ化神を倒す役目を果たしていればいいと人として生きることには手抜きをしていたツケの大きさを痛感しています」

滔々と語る沙夜の姿に朔月は思わずPCを操作する指を止めてしまった。

自分と同世代の女子がこんなに虚ろな眼差しをしてそんなことを言う。仮面ライダーになってしまったのが小学生の頃で一人前になるためにそこからずっと修行の日々だったと簡単に聞かされていた朔月は沙夜が背負ってきた御伽装束というものが彼女にとってどれだけの重荷だったのかを感じ取り、漠然と羨んでいた自分に後ろめたさを覚えた。

けれど――。

「でも、良かったでしょ?」

「はい?」

「ここに楽しいこともくだらないこともたくさん知っている友達がいますぜ? なんてね」

「……朔月」

「大丈夫。沙夜が気後れしていても私が勝手にいろいろ覚えさせちゃうんだから」

「ええ、そうでしたね。頼りになる友達ができて嬉しいです」

けれど、それだけじゃ終わらせない。

ライダーは助け合い。

昨日、章太郎が叫んでいた言葉を思い返して朔月は躊躇わずにこう沙夜へと言葉を届けることが出来た。これもライダーの助け合いだと心の中ではにかんで。

「あ、沙夜! このスレの書き込み、ここ何日かの行方不明になった人たちのこと結構いろいろと書いてあるよ」

「本当ですか?」

ようやく見つけた有力な情報の発見に二人は食い入るように画面を見つめた。

スレの内容は知人が突如音信不通になったという書き込みから端を発して、都内での行方不明や失踪者の話題が様々に書きこまれていた。

ひやかしや捏造、筋違いな誹謗中傷など多少脱線する書き込みも見られたが概ねそのスレは行方不明者の情報提供を乞うものと対象者の詳細が多く見つかった。

「どこまで本当かは判別が難しいですがこの様子だと老若男女関係なく、既に少なくな
い人数がああ螺旋の塔の出現に呼応して姿を消しているようです」

「じゃあ、昨日の夜に私たちがこっちの世界にやって来なかったら章太郎も……」

「恐らく。けれど、どういふ基準で攫われているのかが謎です」

「……待つて、もしかして」

書き込みをスクロールして目を通している中で数多の行方不明者に関する情報に含まれた一つの共通点らしき存在に朔月は気付いた。

「ただの偶然かもしれないけど……行方不明になった人たち、不幸なことが起きてるっ
ぽい？」

朔月の指摘を受けて沙夜が書き込みを見返してみると確かに姿を消した人物たちには直近や過去などの差はあるが職を失った者、家族を亡くした者、恋人と別れた者など何かしらの辛い出来事を経験しているケースが多いようだった。

「章太郎くんも幼い頃にご両親を亡くしています。決めつけるのは早いですが朔月の言
う通り辛い境遇にある人物が誘拐の対象になっているのかもしれない」

「だけど、章太郎はちつともそんな素振り感じられなかったよ？」

「……」

結局、SNSを介した情報収集もこれ以上の成果は得られなかった。

そこで二人は多少の危険を承知で噂の螺旋の塔を見に行ってみようと今後の方針を決めてネットカフェを後にした。

※

朔月と沙夜がネットカフェで情報収集をしていたのと同じ頃。

件の螺旋の塔は異彩な雰囲気をこれでもかと醸し出しながらも東京に暮らす人々の誰にも注目されることなくそびえていた。

そんな強力な認識障害の結界を施された塔に近づくと一人の男がいた。

高級感のある漆黒のスーツを身に纏ったスキンヘッドの英国人のようだった。

「俺の趣味とは合わんが悪くない仕事じゃないか」

やがて男は窓も出入り口も見当たらない塔の間近まで歩み寄りその外壁に手を触れた。すると壁の一部に人間一人が通り抜けられるほどの穴が開き、男は迷うことなく塔の中へと入っていった。

塔の内部は見た目からは想像できないほど広くまるで中世の古城のような趣があつ

た。

だが塔内に漂う空気はとても冷たく重い。

まるで亡者の住処のようだ。

けれど、獣のような獯猛さと冷徹な戦士の佇まいを持ち合わせたこの男は怯えるどころかまるで観光に興じるように口笛を吹いて周囲を見渡していた。

『動くなっス。どうやってこの塔の中に入ってきたのか知らないっスけど、ここは人間のオツサンが入っていい場所じゃあねえっスよ!』

しかし塔の中に入った男は早々に手洗い歓迎を受けた。

雀蜂のような化神バケジャクホウの腕から伸びる馬上槍のような巨大で鋭い針の切っ先を喉元に突きつけられたのだ。

「デカいだけで品のない針をいまずぐしまえ。化神ってのはどいつもこいつも慎みつてもんがねえのか?」

『なっ?!』

「それとも俺と刺し合ってみるか?」

一突きで人間の胴体に巨大な風穴を作ること容易であろうバケジャクホウの針を眼前に見せつけられても男は微動だにしなかった。

それどころかニヒルな口調で軽口を飛ばしながら、片手の二指を針に見立てるとバケ

ジャクホウの巨大な針を突いて見せた。

『ふぎ——!?』

バケジャクホウが怒声を発すよりも前に彼女の肉体から出た破壊音はその意識を乱した。

男はたつた二本の指だけで、それも目にも止まらぬ早業でバケジャクホウの脇腹と腕の針、更に背中に生えた翅に抉るような穴を開けていたのだ。

この男を偶然に迷い込んでしまった馬鹿な人間と思ひ込んでしまったバケジャクホウは愚かだった。男は人間なのではない——魔人の中の魔人なのである。

『ギヤアアア!? こ、この……舐めやがって! 生きて帰れると思うなっスよ!』

『あくちよつと遅くなっちゃいましたねえ。控えてくださいいなバケジャクホウ』

下層の騒ぎを聞きつけて駆けつけたナイトメアメタローは怒り狂ったバケジャクホウを宥めると男の前に傳いた。

『無礼をお許しくださいですうクルージーン様。この子も悪気があつたわけではないのでしてえ』

「同感だ。侵入者にビビる番犬よりはマシだ。だがなお嬢ちゃん、喧嘩を売るなら相手の値踏みを見誤らないことだ」

『ぐ……ッ!』

「誤解が解けたのならさっさと傷を癒して戦いに備えろ。化神の本領、期待しているぞ」
『い、言われなくてもやってやるツスよ!』

甘ったるい独特の口調で本当に誠意が伝わっているのか疑いたくなるがナイトメアメタローから謝罪を述べられたクルージーンと呼ばれる男は寛大な態度を見せて鋭い眼を細めた。

魔人教団が誇る最強の怪人集団・死奏剣。

実力を以ってそのリーダーを務める男がこのクルージーンなのだ。

桁違いの強さを味わったバケジャクホウもそのプレッシャーの前に素直に引き下がるしかなかった。

「それで首尾はどうだ？」

『上々ですう♪ 詳細は上でお話ししますねえ』

塔の最上階にある広間に招かれたクルージーンはナイトメアメタローから計画の進捗状況の報告を受けた。拉致した人間たちを用いたこの世界の侵略作戦である。

『……と、このようにエネルギー源である条件に見合った人間の確保できればすぐにでも計画を実行に移せるかとお』

「無血での侵略とは何度聞いても随分と思いい切ったことを企てたもんだ。だが、本当に可能なのか？」

『はあい♪ ボクとこのスリーパータワーの機能だけでは悔しくも机上の空論でしたが化神を通じて発見した穢れという存在を応用することで実現を確信しましたのです』
 「期待しているぞ。引き続き励め、足りないものがあるなら用意させよう」

報告を聞き終えたクルージーンはナイトメアメタローの計画に不備や抜かりがないことを確認するとあつさりと踵を返そうとした。

『おやあクルージーン様がボクに代わって指揮を執るのではないのですう?』

「能力のある部下を信じて仕事を任せるのも上に立つ奴の役目だ」

『それは光栄♪』

「ライダー共がまた紛れこんで抵抗しているらしいがやれるなナイトメア?」

『——死力を尽くしましょう』

表情のない案山子のような顔でありながら、壮烈な覚悟を宿してナイトメアメタローはクルージーンの言葉に強く頷いた。

「よく言った。ヴァンダル・リーグが寄こした駒も惜しまず使え。連中がいくら死——」
 「おおっと! 陣中見舞いに来たのだが何やら忙しいようだなア!!」

クルージーンという言葉を遮って、突然ふてぶてしいほどの大声が割って入ってきた。

魔^身人^内教団のものでも化神の気配でもない闖入者にクルージーンとナイトメアメタ

ローは同時に殺気を飛ばした。

「よろしい！ 魔人教団は我々の親愛なる協力者だ！ 私の助力を受けるといい!!」

いつの間にか塔内に姿を現したのは素肌にオーバーオールを纏った大柄な男だった。

剛毅なのか無神経なのか自分たちのことなど意に返さず一方的に喋り立てる珍客にクルージーンは野良犬の糞でも見るような軽蔑した眼差しを向ける。

「おい木偶の坊、これからお前の下顎を切り落としてケツに捻じ込んでやる。その前に名前を言ってみろ。せめてもの情けだ安い墓ぐらいは建ててやる」

「ありがとう！ だが私に墓はまだ不要である！ 我らがヴァンダル・リーグの宿願を果たしていないのでなア!!」

不愉快な男が不愉快な組織の名前を口にしたことでクルージーンは苛立ちながらも警戒と強め油断というものを自らの内から排除した。

彼自身も喋ることが可能なほどの上位存在と出会うのは初めてのことであったからだ。

「私の名はバーバトラス！ ヴァンダル・リーグのバーバトラスだア!!」

謎多き組織から放たれた新たな来襲者。

不遜にして暴虐な悪意もまたこの世界と仮面ライダーに牙を剥こうとしていた。

■ 戦姫が駆ける

「お待ちせいたしました。ごゆっくりどうぞ」

「おお〜」

オープンテラスカフェの一席に座っていた朔月と沙夜は店員が運んできた二種類のフルーツパイに目を輝かせていた。

買い物や調査をひとしきり終えて、帰路についていた二人が偶然目にしてしまった期間限定特製スイーツ二種の立て看板。

チョコレートで描かれたイラスト付きの看板をしばし見つめていた二人が同じタイミングで互いの顔を窺い、力強く頷いてお店に足を伸ばしたのが十五分前の出来事だ。

世界を救う使命を背負う仮面ライダーである彼女たちだがそれ以前に普段はただの女子高生。そして、女子高生とは大抵が【期間限定】や【スイーツ】の前に無力なのだ。

「では朔月、こちら御禁制の品です」

「フフフ……苦しゅうない。お主にも褒美じゃ」

妙な小芝居を繰り広げながら二人は自分が注文したスイーツを半分に切り分けて二

人でシエアしていく。こうすれば複数ある期間限定のスイーツを一気にコンプリートできる。女子高生のテクニクである。

「ん〜おいし〜い〜」

口いっぱい広がる香ばしいパイとシナモン多めのリンゴのさわやかな甘みに朔月は満面の笑みを浮かべる。沙夜もその対面でカスタードクリームと洋梨の見事な調和のとれた甘味にほっこりと微笑んで頷いていた。

「……ありがとうございます、朔月」

「へ？」

しばしスイーツを堪能していた二人だったが突然、沙夜の方からぼつりと神妙そうな声色の一言が放たれた。

「さっきの買物もこんな風に仲良くなった友人とお茶をするのも私にとっては初めての体験で……とても楽しい時間をくれて、だからちゃんとお礼を言っておかないと思いますよ」

「沙夜……そんな風に言ってくれるなら私も嬉しいよ。ただ」

プレゼントされたヘアピンによって露わになった片目はまだどこか泳ぎがちだった。沙夜は努めて朔月の瞳を見つめながら感謝を伝えた。

他者からすれば何を大袈裟と思うかもしれない。けれど、沙夜にとっては紛れもな

く朔月が経験させてくれた出来事はどれも夢のような時間だった。

「ただ……沙夜つてもしかして、ぼっちな人なのかな？」

「ぼっ!?! ち、違います!」

「いや、あんまりにも浮世離れしたところあるから、まさかと思つてつい」

海よりも深い慈しみに溢れたような眼差しでちよつと遠慮気味に投げかけられた質問に思わず沙夜はスイーツとセットで頼んでいた紅茶を吹き出しかけた。

もちろん朔月も悪気があつたわけではない。

見た目や所作がとても同世代とは思えない非日常の塊でかつ生真面目な天然気味の沙夜が堅くなりすぎないように場を和ませようと気遣つて出た言葉だった。

「ちゃんと通つている高校や御守衆には友人や知人はいますし、同性の友達とはなかっただけで外食は永春くんに連れて行つてもらつて何度か経験済みですから、決して友達がないないタイプじゃありませんから!」

興奮して顔を赤くしながら弁解する沙夜だったが多少自覚のある痛いところを突かれたためか思わずいまままで別段口にしていなかった少年のことまで口走つてしまった。

そして、そんな気になる単語を青春真っ盛りなJKのスタンダードである朔月が聞き逃すはずもなく。

「ちよつと待つて永春つて誰!?! 彼氏? 彼氏かあ!?!」

「ああ……なんていうか、その……はい」

家庭的な事情もあり自身についての色恋に関しては殆ど興味を持っていない朔月だが友達の恋愛事情は別腹とばかりに目を輝かせて詰め寄った。

結果、迂闊にもボロを出してしまった沙夜はウキウキの朔月に永春との関係を根掘り葉掘り聞かれることになってしまった。

何事もない平和な昼下がりの午後を過ごす二人であったがこの数十分後に事態は急変することになる。

※

賑やかなティータイムを切り上げて、朔月と沙夜が見回りを兼ねて護衛のために章太郎を迎えに彼が通う学校へと向かっていた時だった。

沙夜が早朝に放った式神から学校付近に怪人と思わしき異形が出現したと言う報告が齎された。

「朔月こつちです！」

「ちよつと待つて沙夜！ この方角じゃ学校へは遠回りになるよ!？」

急ぎ現場へ急行しようとして走り出した二人だったがどういうわけか沙夜は全く見当外れの方向へと進んで行ってしまう。

速度を落とせばすぐに小さくなってしまふ沙夜の背中を追い掛けながら朔月は彼女の意図が読めずに不安を抱く。

「よし、人気はありませんね。ハヤテ！」

【■■■■■■——！】

やがて誰もいない寂れた散歩コースと思わしき場所まで辿りついた沙夜は高らかに愛機の名を呼ぶ。すると携帯して金属板に埋め込まれた術式が始動、転移術にて式神ピークル・ハヤテチエイサーが二人の目の前に召喚された。

「わっ!! これってあの夜に沙夜が乗ってたバイク?」

「はい。流石に衆人環視の中でハヤテを呼び出すのは憚られるので……私の後ろに乗ってください。急ぎましょう」

「う……ん?」

颯爽と白いカスタムバイクに跨った沙夜に促されてその後ろに乗ろうとした朔月の耳に背後から唐突にもう一つのエンジン音が響き渡った。

「え? ウソ……なんでこれが?」

「いつの間に? 朔月、このバイクに心当たりが?」

振り返った朔月は目を疑った。

まるで幻のように忽然と現れた漆黒のカウルを持つバイク。

それは間違いなく朔月たちが毎夜招かれて死闘を繰り広げるノーアンサーが作り出した戦場に配備されたプライドステイラーだったのだ。

「ノーアンサーの仕業？ ううん……いまはそんなのどうでもいい！」
事態は一刻を争う。

あの妖しげな少女の考えに疑問を持たないわけではないがいまはもつと大事なことがあると朔月は躊躇わずにプライドステイラーに跨るとマリードールを懐から掴んだ。

ネックレスとなった白い女神像を細い鎖を力任せに引き千切る。瞬間、淡い光が集まって朔月の腹部に黒いベルトが現われる。

「変身！」

《Silver》

《戦いは止まらない 何故？》

運命は変わらない 何故？》

朔月が銀の光に包まれるのと同時に沙夜もまたブレスレットの偽装を解いた怨面を被ると精神を研ぎ澄ませて呪文を唱える。

「オン・カルラ・カン・カンラ——白鴉の怨面よ、お目覚めよ」

弛まぬ集中、研ぎ澄ます戦意。

白い肌には無数の蛇が這うような赤い痣のような紋様が浮かび上がる。

「クウ……ア、ア——変身」

力は怨念。

怨念は力。

全身を苛む数多の怨念無念の疼きを耐えきつて望月沙夜は覚悟を以つてその言の葉を唱えた。白く輝く旋風の中で彼女は超人へと姿を変えていく。

やがて光と風が弾けた時、少女たちは鋼の愛馬へと騎乗して仮面の戦士へと変身を完了させていた。

「いきましようー！」

「うんー！」

ビヤクアの号令で二人を乗せたマシンはエンジンを轟かせて駆け出した。

ハヤテチェイサーは白亜の機体を荒馬のように力強く奔放に。

プライドステイラーは銀姫が跨つたのに呼応してフロントカウルに死神を彷彿とさせる檻樓を纏つた鉄仮面のクレストと銀色のラインを浮かび上がらせて風を切る。

「すごいのお持ちだったんですね！」

「借り物？みたいなものだけどね！」

「そうなんですか？ だけど乗る姿、サマになっていますよ」

「ホント？　だったら、今日は私たちダブルライダーで気合入れていこう！」
「はー！」

疾走する愛機たちの上でお互いを鼓舞し合いながら二人の戦乙女は悪しき魍魎が跋扈する戦場へと急行した。

※

小学校付近にある森林公園はダムドたちが溢れ返り白昼の地獄と化していた。

奇声を上げてゾンビのように公園の利用者たちへと襲い掛かるダムドたちに人々は悲鳴を上げて逃げ惑うしかない。だが、そんな絶望の時に終わりを告げるように鋭い二色の爆音が乱入してくる。

「たああああー！」

「ハイヤアアアー！」

漆黒の弾丸と真白き突風がダムド達を弾き飛ばす。

大ジャンプして公園の敷地内へと突入したプライドステイラーとハヤテチエイサーは機動力に物を言わせた縦横無尽の突撃でダムドの群れを蹴散らす。

そして、銀姫とビャクアは騎馬武者よろしくバイクに乗ったまま得物である細剣と大

鎌を振るい恐怖という概念が欠如して亡者のように殺到するダムドを次々に切り払っていく。

『地獄へようこそ、仮面ライダー』

「くっ……あなたは!?!」

『久しぶりね。貴女の可愛い悲鳴が聞きたくて遊びにきてあげたわよ』

しかし、逃げ遅れた人間を守りながら必死にマシンを操り、剣を振るう銀姫を邪な稲光が襲った。間一髪でプライドステイラーから飛び降りてこれを回避した銀姫の視線の先には因縁の相手バケミヅキが殺意を漲らせてゆらりと立ち塞がっていた。

「朔月、いまいきま——!」

『ウオガアアアウ!!』

そして、既にハヤテチエイサーから降りて大鎌を駆使して白兵戦を展開していたビャクアの前にも新たな刺客が放たれていた。

筋肉が詰まったような屈強な黒い体に隈取りのような銀の模様が走った鬼のようなボスダムド・オーグレンスダムドである。

「私は大丈夫! 沙夜は沙夜のやれる限り暴れちゃえ!」

「分かりました。ご武運を!」

予め図られていたように分断された銀姫とビャクア。

しかし、二人の仮面ライダーは微塵も戦意を揺らがすことなく目の前の敵に果敢に立ち向かっていく。

※

「ボスダムド……相変わらず得体の知れない敵ですね」

『ガアアアアウウ!!』

化神バケミツキと対峙する銀姫を案じながら、ビヤクアは眼前で殺意の矛先を自分に剥き出しにするオーグレンスダムドに意識を集中する。

雲薙ぎの大鎌をゆらりと上段に構えると未知数な敵の詳細を注視していく。

腰を落とした低姿勢で四肢に力を漲らせて、いまにも飛び掛かってくるかのように荒い呼吸でこちらを威嚇してくる様は鬼というよりも飢えた獣を想起させる。

「……」

オーグレンスダムドの鋭利な鉤爪の微かな動きさえ見逃さずにビヤクアは敵を観察する。

どんな攻撃手段を有しているのか？

どんな異能を隠し持っているのか？

どんな攻め手で仕掛けてくるのか？

本質的に先手必勝の傾向が見られるビヤクアであるがただの猪武者というわけではない。

人間の常識の埒外にある化神との戦いに身を置く都合、敵を識ることの大切さを彼女はよく解っていた。

『オオオオオオツ!!』

一秒が長く感じるような重苦しい膠着状態に痺れを切らしたのかオーグレンスダムドが唸り声を上げて先に動いた。地面に大きな足跡が作られるほどの豪脚を以ってビヤクアに飛び掛かり鉤爪を振り上げたのだ。

「……………」

ビヤクアは自分に強く言い聞かせるようにジツと構えて敵が自分の間合いに侵入する機を待った。既に大鎌の切っ先は高々と掲げられている、オーグレンスダムドの爪を紙一重で回避して、返す刀で得物を振り降ろせば冷酷な湾刃は肉も骨もお構いなく異形を裂くだろう。

『ウガアアアアツ!』

「これは……………なんの!!」

戦いには何が起こるか分からない。

ビヤクアはそれをいまこの瞬間に何度目か振りに実感する。

オーグレンスダムドが仕掛けたのと同時に巻き起こった突風とその奇怪さにいち早く勘付けたのは敵を観察していたお陰だろうか。

「やあああつー！」

『ガアアアウウー！』

操り纏った風により彼女の見立てより深く間合いへの侵略してきたオーグレンスダムド。

その恐ろしげな鉤爪にまで風が帯びていることを見抜いたビヤクアは咄嗟に大鎌を投げつけ、徒手空拳へと切り替えて迎撃した。

オーグレンスダムドの爪は妖風を帯びたことで真空波よろしく大鎌を輪切りにしてしまったのだ。

「ハイヤー！」

まともに食らえばひとたまりもないオーグレンスダムドの殺傷力。だが、ビヤクアは怯むことなく白兵戦で相対する。激突に至るまでの長い静が嘘のように両者の間には激しく慌ただしい殺戮が繰り返り広げられていく。

武器破壊を成功させて卑しく笑う敵が着地した瞬間を狙い澄まして死角から浴びせ蹴りを叩き込む。

不意打ち気味の一撃は残念ながら凌がれたが相手の攻めの勢いも削げたと彼女はすぐさま起き上り反撃に備える。

『キシヤアア——!!』

「甘い! はあつ!」

荒々しくも正確に急所を狙って放たれる斬撃に等しいオーグレンスダムドの爪攻撃をビヤクアは滑らかに円を描くかのような剛柔兼備の腕運びで捌いていく。そして、僅かな隙を見出して重ねた手刀をオーグレンスダムドの脇腹へと打ち込む。

『ウギヤ!?!』

「退魔七つ道具が其の壱——天狗の羽団扇!」

斧を叩き込むような一撃を食らい敵がよろめき悶えている間にビヤクアは新たな退魔道具を召喚すると羽団扇を逆手に握り、蹴りを織り交ぜた動きでダムドの爪と切り結ぶ。

「このまま一気に鬼退治といきましょう!」

神通力によって強化された羽団扇は鋼鉄さえ容易く切り裂くオーグレンスダムドの鋭い爪や風による戦力増強の異能にも屈することなく火花を散らしながら競り合う。

戦いは剛力では劣るが素早さで勝るビヤクアが持ち前の短刀術と格闘の合わせ技で着実にカウンターを一撃、また一撃と加えだし徐々に優勢へと傾き始めていた。

『ハオオオオオ——!!』

「くあっ!？」

だが、オーグレンスダムドも譲らない。

ボスダムドとしての意地があるのかは定かではないが煙幕代わりに羽根を巻き散らせ、渾身の一撃を見舞おうとしたビヤクアを大声という名の衝撃波で吹っ飛ばした。

「この……ッ!」

火花を上げ痛々しく地面に体を打ちつけて転がるビヤクアに追い討ちをするべくダムドが地を駆ける。

立ち上がったの反撃では間に合わないとビヤクアは痛みを堪えながら咄嗟に足払いを放つ。けれど、オーグレンスダムドは有り余る闘争本能の賜物か伸びてきた長い足を飛び避けるとそのまま一回転して前宙踵落としのような攻撃を繰り出してみせた。

「ぬううう! 驚きました……怪人ならぬ怪物と見ていましたがこんな芸当が出来るとは!？」

『ウウ……オオオオオオ!!』

「がはっ!？」

上段で両腕を交差してギリギリで防御を間に合わせたビヤクアだったが彼女はまるで空手道の技に酷似した動きをするようになったダムドに驚きを隠せなかった。腕の

骨が軋むのを感じながら堪える彼女の腹へと間髪入れずに丸太をぶつけられたような衝撃の前蹴りが突き刺さる。

「ハア……ハア……油断していたつもりはなかったんですがね」

化神とはまた別種の異常性と底知れない多彩な力を個々で有するダムドの脅威を思い知らされたビヤクアは同時にそんな正体不明の怪人と渡り合ってきた銀姫の——朔月ことを想った。

「想像以上の難敵とずっと戦っていたんですね朔月は」

自分は正しく仮面ライダーなのか？

彼女を取り巻く環境と戦いの異質さから戸惑いと苦悩を漏らしていた普通のどこにでもいる同世代の女子高生。彼女は見方によつては沙夜にとつて叶わない憧れで、とつくの昔に決別した存在のような物だ。本来戦いや怪物たちとの命のやり取りなどは縁遠くなければいけない人間だ。

「胸を張つて良いに決まっています。自信を持って良いに決まっています……でなきやおかしいですよ、朔月」

昨夜に自分の隣で悩みを話してくれた彼女を、不安を教えてくれた朔月を想い返してビヤクアは自身の戦意という火に薪をくべ直す。

彼女はきつと本当なら自分が身を置くような血生臭く怪異溢れる世界とは無縁の人

間のはずだ。

そんな普通の少女が仮面ライダーにされて、あろうことか同じ少女たちと殺し合いをさせられている。正体も分からない怪物とも命のやり取りを強いられている。

理不尽塗れの境遇にも挫けずに気丈に頑張っているのだ。

戦い以外はいまのところお粗末なほど未熟な自分がこんなところで足踏みしているわけにはいかないのだ。

初めて出来た同世代の女子で仮面ライダーな友人である朔月のためにも負けられない。

「ダムド……鬼退治と言ったのは訂正します」

羽団扇を逆手に構えて、ビヤクアは向かい風の中で強く立ち上がる。

「ここからは鬼狩りの始まりです。御伽装士の底力、思い知らせてあげましょう」

『ガアアアアウツ!!』

オーグレンスダムドが動き出す前にビヤクアは仕掛けた。

放たれた矢のように一直線に走り出す彼女を再び鬼の口から放たれた氣息の衝撃が襲う。

ビヤクアは衝撃波に羽団扇で巻き起こした白旋風をぶつけることで対抗する。二つの強烈な力が衝突すると周囲の大气が震えて、木々が騒ぎ立てた。

「——!?!」

『ウガアアアウウツ!!』

衝撃波を相殺することには成功したビヤクアだったが氣息と風が激突した余波をまともに食らったのか糸が切れたマリオネットのように前のめりに崩れ落ち始めてしま
う。

それを好機と見たオーグレンスダムドは一気にビヤクアの頭蓋を踏み砕こうと力一杯に全身を弾ませた。

「一手……誤りましたね」

地に伏したビヤクアの頭部をオーグレンスダムドが踏み潰そうと上空から降りてきた間際で逆転の風が吹いた。

「ムゲンの真似事ではないですが——」

羽団扇を大きく振るい地面に目掛けて烈風を起こしたビヤクアはその勢いで浮き上がる^がと紙一重でオーグレンスダムドの異形の足を回避。そのまま相手の動きを封じて土台にするかのようにオーグレンスダムドの膝に足を掛けた。

「ハイヤアアア!!」

『ア、ガ——ツ!?!』

シャインクワイザード
閃光魔術、炸裂!!

回避も防御も叶わない状態から繰り出されたビャクア渾身の膝蹴りがオーグレンスダムドを横一閃に薙ぎ払う。それは別の世界にて単騎で戦う我が道を往く戦友との交流で会得した思いがけない切り札だ。

「仙術・羽根幻朧」

顔面をいびつに変形させて悶絶するオーグレンスダムドにビャクアは勝負を仕掛けた。

羽団扇に神通力を漲らせて一振るいすると純白の羽根がどこからともなく溢れ出し周囲一帯を羽根吹雪が包み込む。

『ガア……アア、ア!』

どうにか持ち直したオーグレンスダムドは羽根吹雪の渦中にて目の前の光景に絶句した。

夢か現か幻か、ダムドの視界には無数のビャクアが出現して自分を取り囲んでいたのだ。それが彼女の見える幻覚だとは気付かずにオーグレンスダムドは殺られる前に殺れとばかり両腕の鉤爪を狙いもつけずに無我夢中で振り回して抗戦するがどう足掻こうと手遅れだった。

「退魔七つ道具が其の式——裂空の快刀」

『イギヤアアア!』

凜とした声が白の世界に響くと煌めく刃が背後からオーグレンスダムドの胸部を突き刺し破る。

「オン・カルラ・カン・カンラ！ いぎ！ いぎ！ いぎッ!!」

『ガア……アアアア、アア!?!』

「退魔覆滅技法——乱鴉の太刀!!」

まるで羽根吹雪に覆われた世界を数限りない輝く剣閃で塗り替えるように縦横無尽の乱れ斬りがオーグレンスダムドを粉微塵に切り捨てた。

やがてビヤクアが仙術を解くとオーグレンスダムドの残滓は夥しい量の羽根吹雪と共に断末魔さえ残すことなく忽然と消え去ってしまった。

「これにて、落着……ではないですね。次へ行きましょう」

快刀を納めて残心を終えたビヤクアは少し気の抜けた独白を呟きながら周囲を見渡すとバケミツキと戦っているであろう銀姫と合流するために気力を入れ直してまた走り出した。

※

「しつこい……って文句付けて良いよね。二回目だけど」

『ふふふつ、安心しなさい。ここで因縁もキツチリ付けてあげるから』

バケミツキと対峙した銀姫は、細剣を油断なく構えながら相対した。

沙夜から教わったことで正体を知った、穢れからなる外道の怪人こと化神。その一体バケミツキ。この世界に来てから初めて銀姫が相対した因縁の怪人でもある。先日は油断の隙をついて一泡吹かせたが、その辛酸をよく憶えているらしい。今回は最初から苛烈な敵意を剥き出しにしていた。

『私はねえ、痛めつけるのは好きだけど……されるのは嫌いなものよッ!』

「それは良い趣味をしてる……ねっ?」

軽口を黙らせるように奔った電撃。それが戦端だった。

己目掛けて放たれる電流に辛うじて反応した銀姫は飛び退くように躲す。しかし即座に、バケミツキのスタンガンには次の紫電が閃いた。

『また踊ってもらおうわよ!』

「くつ、近づけない!」

雷の連射が銀姫を襲う。開いた距離から一方的に迸る電撃は、最初の邂逅めいていた。であるなら、解決策も同じ。

「……やあッ!」

タイムリングを見計らい、銀姫は細剣を投げた。再び電撃を防ぐ避雷針とすべく。

狙い通り二人の中間に放り込まれた細剣は電気を吸い込み防いでみせる。そこまでは先の再演。

だがバケミツキは嘲るような声で嗤った。

『ふふふっ！ 二度同じ手を通じると思っているの？ だとしたらとんだ能なしね！』
笑い声が響くと同時に、バケミツキは触手を伸ばした。

「！ しまった！」

触手は細剣を地面に落ちるより早くキャッチして、そのまま絡め取ってしまう。銀姫は唯一の得物を奪われた形になった。

『ふふっ、これでもう、防ぐ術は無いわねえ！』

背後へ細剣を足元へ捨て踏みつける。これで細剣はもう使えない。そして電撃攻撃を再開する。

「うぎゃっ！」

何度かは躲すが相手は電気。幾度も放たれる稲妻を回避しきれず、銀姫は何発かを受け止めることになった。全身に走る痛みと痺れ。決して愉快ではないそれに、銀姫は口元に苦悶の表情を浮かべる。

「く……ああっ！」

『ふふふっ！ ああ、いいわあその声！ もつと聴かせて頂戴！』

銀姫の苦しむ声にバケミツキが歓喜する。人の不幸で育ち、人の肉を喰らう定めである化神にとつて人の悲鳴は、本能的に響く物なのだろう。

だからか、一瞬だけ電撃がブレる。

「っ、ああああっ!!」

その隙を銀姫は見逃さなかった。電撃を躲していた脚を無理矢理ねじ曲げ、バケミツキに向かって飛び込む進路へ変える。一目散の直進。真正面からの突撃だ。

分かりやすい突進だ。また電撃が襲い来るだろう。銀姫もそれは覚悟していた。しかしこのまま雷に打たれ続けても勝機は無い。一か八かに賭けるしかなかった。

『なんですつて!! —— なんてね』

「はあああ……ぐっ!!」

だがバケミツキに肉迫する直前、銀姫を伸ばされた触手が絡め取った。触手はあつという間に手を巻き込み、簧巻きのように銀姫を拘束してしまう。身動きの取れなくなった銀姫をバケミツキは嘲笑った。

「ぐうっ!!」

『馬鹿ね、わざと見せた隙に決まってるじゃない』

先程見せた電撃のブレは、敢えてバケミツキが作り出した隙だった。

『あれだけの屈辱を飲まされたのも。私手ずからでくびり殺してあげなきや気が済

まないわ……!」

先の戦いでしてやられたバケミツキはどうしてもその溜飲を下げずにはいられなかった。故にわざと近づくように誘導し、触手による拘束へ誘い込んだのだ。

そのまま徐々に力は強まっていき、銀姫の身体を持ち上げ押し潰さんと締め上げていく。

「あ、ぐうっ……!」

『ふふふっ! いいザマね。悲鳴が濁るのは少し残念だけど、それは死語の貴女を甦ることで精算をつけるわ!』

半面の下で苦悶の表情を浮かべ、悶える銀姫。

そうこうしている内に、どんどん締め付けは強くなる。銀姫は足をバタつかせ抵抗を試みるが、それも徐々に弱まっていった。

「ぐ……だめ……やつぱり、私なんかじゃ……」

意識が薄れていく中で、銀姫は弱気に呟く。

元の世界において朔月は、殺し合いの参加者の一人に過ぎなかった。それがこの世界に来て、憧れていたヒーローのようだと言えられて、すっかりその気になってしまっていた。自分でも、誰かを守れる騎士になれるのでは無いか、と。

……だがやはりそれは、幻想だった。結局自分は踊らされた愚か者に過ぎない。故に

こうして出しゃばったツケを今、払わされているのだ。

銀姫はそう絶望し、苦痛の中意識を手放そうとする。

しかしバケミ、ツキの放った言葉がそれを止めた。

『貴女を始末したら、次はあっちの御伽装士ね。その次は、攫い損ねたあの子にしましうか』

「——っ！ 沙夜……章太郎……！」

銀姫の瞼の裏に浮かぶは、この世界に来てから出会った人たち。

こんな自分でも憧れて、世界を守るヒーローの一員として認めてくれた少年、章太郎。そんな彼を家族のように大切に想っている叔父、権兵衛。

そして、沙夜。どこか普通じゃなくて、戦うときは毅然として、けれど感情豊かな少女。

美人で、でもものぐさで。一緒に笑って、はしゃいで。ほっとけなくて、頼りになつて。まだ聞いていないことがある。まだ話していないこともある。もつとずつと、仲良くなりたい。同じライダーとして。それとは関係の無い、ただの友達として。

「く……あ、ああ……！」

そんな彼女たちに危機が迫る。

それだけは、

『……何？ 急に力が強く……!?!』

「ぐ、あああああああつ!!」

それだけは、どうしても認められなかった。

両腕の力を振り絞った銀姫が触手を内側から押し広げていく。そして十分に広がったところで触手を掴み、力任せに引き千切った。

『ぎ、ぎやあああああつ!!』

突然自分の一部を失ったバケミツキは痛みに悶え後退る。解放された銀姫は着地すると、荒い息をつきながら細剣を拾い上げた。

「はあ、はあ……これが仮面ライダーだとか、なれたとか、今の私じゃうまく答えは出せない」

朔月はまだ、自分のことを仮面ライダーだと胸を張って言えなかった。今この世界ではヒーローとして振る舞えても、結局元の世界に戻れば殺し合いだ。そんな自分が騎士として振る舞って良いのか、迷いはある。

仮面ライダーがどういう存在なのかも知らない。章太郎に見せてもらった動画だけではまだ分からなかった。表面的な憧れは抱けても、その本質を理解するには経験も知識も足りない。あるいはそれが分かるときにはもう、何もかもが手遅れな未来だっさり得た。

「だけどー」

それでも銀姫は叫ぶ。

「今は戦う！ 生き残る為でも殺す為でも無い。大切な人たちを、世界を、守る為に戦う！ それが今の私の答えだ！」

仮面ライダーとは。ヒーローとは。相応しいのか、否なのか。分からない。分からないことだらけだ。

それでも確かな事実の一つあった。

自分には、戦う力がある。

今は、それだけでいい。覚悟も意義も、今は、まだ。

『おのれええええ!!』

予想外の反撃を受けて、バケミツキは怨嗟の声を上げた。もうこれ以上遊ばせてはいられない。生意気な小娘を仕留めるべく、残った触手を広げ稲妻を閃かせる。

対して銀姫は怒りもなく、ただ決意を以てバツクルに縛り付けられたマリードールをなぞった。

《Silver Execution Finish》

歪んだ電子音声か鳴り響く。手にした細剣を八双に構え、銀の光を漲らせる。そしてそれを振り上げ、切り下ろした。

「はあああああつ!!」

切り裂いた軌跡が刃となってバケミツキへ奔る。それにバケミツキは渾身の電流を放つて受け止めようとした。

『こんなものオ!!』

目を瞑りたくなるほどに激しい電撃。銀の斬撃と電流は鬩ぎ合う。

一瞬の拮抗。その後、どちらもが弾けるように消えた。

『ハッ! 貴女の必殺技なんて所詮その程度よ!!』

相手の奥の手を相殺し、バケミツキは勝ち誇る。だがそんな彼女に、もう一度聞こえる音があった。

《 Silver Execution Strike 》

『は?』

銀の刃が散り、電撃が晴れた、その向こう。そこには飛び上がる為に足を溜める銀姫の姿が。

バケミツキにとつての予想外。誤算。

それは二回目の必殺技。

「はあああ……!」

銀の光を右足に集め、駆け出す。そして裂帛の気合いと共に飛び上がった。

「せ……やあああああーっ!!」

渾身の跳び蹴り。光の矢のようになった銀の輝きは、油断していたバケミツキの身体に鋭く突き刺さった。

『あ、ああ……そんな……!』

バケミツキの柔らかい身体ではそれを受け止めきれない。銀の光は深々と突き刺さる。

そして、貫いた。

『悲鳴を、上げるのは……私イイーっ!!?』

透明な身体はまるで水袋が破けるように弾け、爆発した。バケミツキの身体は黒い穢れへと還り、周囲に硝煙めいて散る。化神の最期だ。

光となって貫いた銀姫はその様子を見て、安心したように膝を突いた。

「倒せた……けど、一連続はやり過ぎた、かも……」

必殺技の二回連続発動。それがバケミツキの予想を大きく上回り、決着となった。初めての試みだったがその代償は大きく、負荷からか銀姫は今までにない身体の怠さを覚えていた。

「あんまりやりたいものじゃないな……って、まだ戦いは終わっていないや」

それでも銀姫は休んでいられないと思ひ直し、立ち上がる。

加勢に。あるいは、次の戦いへ。

……と、思ったのだが。

「? マリードールが……」

銀姫が目線を落とすと、ベルトのマリードールが光っていることに気がついた。今までに無い状態に銀姫がキョトンとしていると、光の中から小さな何かの姿を現わし宙へ浮かぶ。

それは車のキーめいた金属片であった。掌に収まるサイズの小さな鍵。持ち手の部分には何かが描かれていそうなスペースがあるが、今は空になっている。

「え、何コレ……あ、そういうえばノーアンサーが何か言つてたかも?」

この世界に来る前ノーアンサーが何かを仄めかしていたのを銀姫は思い出した。異世界移動のシヨックですつかりと忘れていたが、確かおつかいだとか採取だとかと言っていた気がする。

戸惑う銀姫の前で鍵はクルリと回ると、周囲にまだ残る穢れ、つまりバケミヅキの残滓を吸い取り始めた。穢れは掃除機めいて鍵の中へ吸い込まれていき、まるで最初から何も無かったかのように綺麗にしてしまった。

後に残されたのは鍵だけだ。

「え、ええと……あれ、こんな柄だっけ」

銀姫が恐る恐る手を伸ばすと、無地だった絵柄が変わっていることに気がついた。水色に、クラゲのような生物が描かれたレリーフになっている。

不思議に思いつつ銀姫はそれを回収する。そして、こんなことにかまけている場合では無いことを思い出した。

「そ、そうだ！ 早く助けなきや！」

銀姫は次の戦場目掛けて駆け出す。その手の中で鍵は——化神バケミツキグレイヴキーは、妖しく輝いていた。

※

時間を少し遡る。

朔月と沙夜が外出中、喫茶 Hameln ではいつもと変わらない穏やかな時間が流れていた。

朝の準備を二人に手伝ってもらったこともあつて権兵衛はいつもより腰回りが幾分楽な程度にゆとりがあつた。

お客の入りもいつも通り、つまりはまあまあだつたことは喜ぶべきか嘆くべきかは複雑なところではあるが。

「……鼻の舌を伸ばした野郎共が溢れ返るよりはマシかね」

店内のテーブルにぽつり、ぽつりと居座る見知った常連客たちには聞こえない声量で権兵衛は呟いた。

開店から早十年以上が経過した当店は大繁盛もなければ閑古鳥が巢を作るほどに鳴くこともなく営業してきたどこか懐かしい趣がある街の喫茶店を通つて来た。

しかし、近頃は稀に女性客が殺到して大忙しという日が何度かあった。

それは言わずもがな御剣燐や双連寺ムゲン、黒神恵理也といった異世界からやってきた仮面ライダーの少年たちがアルバイトして店で働いていた期間だ。

面構えの良い若者たちが給仕をしてくれるというサービスに食いついた近所のママ達の迫力は凄まじいの一言だった。

「あの子らが本格的に店を手伝うとか言い出したら、どうしたもんかねえ」

つまり臨時のアルバイトが少年ではなく少女であればそれと似たことが発生しても可笑しくはない。朔月と沙夜の二人は権兵衛から見ても別嬪だと考える。

もしも彼女たちが宿賃の代わりにウエイトレスとして働く店に出ているのなら噂を聞きつけた商店街や近所の男たちが可憐な乙女たちを一目見ようと自分の店に押し寄せていただろう。

商売繁盛は良いことだがそんな不純な理由でやってきた連中に自慢のコーヒーを振

舞うのは釈然としない。仮想とはいえ複雑な心境の権兵衛であった。

「フフン♪ とても美味しいコーヒーでした。お勘定をお願いします」

「ありがとうございます。そう言っていただけだと光栄だよ」

レジの前から聞こえてきた若い声色に権兵衛は気持ち切り替えて伝票を預かった。

お客に優劣をつけるのはご法度だがそれでも叶うならこういう気持ちの良いお客ばかりならばと思わずにはいられない。この一言を貰えるのは無上の喜びだ。

声の主は常連客ではなく、ふらりと店に入ってきた見かけぬ顔の若者。日本語は達者だが支払いの際に硬貨を取り出すのに少しまごついてる辺り恐らくは外国人だろうか。

「観光かね？」

「まあ、そんなところかな。貴重なお話をありがとうございます」

「こんなおじさんの話でお役に立てたのなら嬉しいよ」

人懐っこい性格なのかこのお客はカウンター席に腰掛けてそれなりの量の食事を平らげながら、この周辺には何があるのか？安宿や銭湯はないのか？など話しかけてきたものだから権兵衛の記憶にも印象深く残っていた。

日本の文化の何が外国人旅行者の琴線を刺激するのか未知数なのできつとこの若者もそういつた趣向の日本びいきな観光客なのだろうと考える。

「ごちそうさまでした」

「ありがとうございます。またのお越しを」

「ただいまー!!」

会計を済ませて、若者が観光気分全開なサングラスをして店を出ようとした矢先、入口の扉が開いて元気の良い声が飛び込んできた。

「おっと」

「わあっ!?!」

ランドセルを背負って店内に走って入って来た章太郎は案の定、外国人客にぶつかり受け止められてしまった。朔月たちの不安とは裏腹に行き違いで章太郎は怪人の襲撃に遭うことなく既にこの時帰宅していたのだ。

「こら章太郎! お客さんもいるんだから学校から帰ってきたら裏から入れといつも言っているだろう! 君、怪我はないかい?」

「ごめんなさい」

「気にしないでいいさ。子供なんて元気すぎるぐらいで丁度いいんだ」

権兵衛に叱られてしゅんと謝る章太郎の頭を犬でも可愛がるようにやや乱雑に撫でて、若い客は快晴のような笑顔を残して喫茶 Hameln を後にした。

そんな印象的なお客が去った後も店には穏やかな時間が流れた。

『子供というのは純粋ですからね、大人に比べて燃料として良質なのですよ』

「成程！ まあ、私が出たのだから万事上手くいく何でもよいわ！」

『お願いですからボクの指示に従ってくださいね、違約した場合はクルージーン様に殺してもらいますのでえ』

噛み合わないやり取りを交わしながら招かれざる客たちは喫茶 Hameln の扉を開ける。

「いらつしや……なんだあんたたち!？」

「か、怪人!？」

幸か不幸か既に先程までいたお客たちは全員帰ってしまったっており店には章太郎と権兵衛しかいなかった。そして、二人は玄関に現れた最悪の来客の姿を見て驚愕する。

オーバーオール of 巨漢とここに辿りつくまで全ての人間の認識を幻術によつて歪ませて怪人体の姿のまま堂々と商店街を歩き渡りこの店へとやって来た不気味なナイトメアメタローの異形がそこにあったのだ。

『おやおやあくお客様相手に無礼なお店ですねえ。ボク怒っちゃいましたよお』

ハロウインの夜道を練り歩く案山子のお化けのようなどこか滑稽な外見をしたナイトメアメタローは甘ったるくも背筋が凍りそうになるような声で愉快そうに言いながらピッチフォークのような杖を章太郎たちに突きつけた。

『なあってねえ。おチビさんだけでも良かったのですが折角ですのでお二人様……夢の国へご招待ですう』

仮面の戦乙女たちの奮闘を嘲笑うかのように世界を蝕む魔人の謀略は止らない。